

タイトル	資料と解説小橋貫一「陣中日誌シベリア派遣」
著者	小橋，宗一郎；郡司，淳；KOHASHI，Soichiro； GUNSHI，Jun
引用	北海学園大学人文論集(51)：186(57)-106(137)
発行日	2012-03-30

史料と解説 小橋貫一「陣中日誌 シベリア派遣」

小橋 宗一郎
郡 司 淳

一 文書群の概要

ここに紹介するのは、「陣中日誌 シベリア派遣」と題する、シベリア出兵に動員された一兵士の記録である。

この「陣中日誌」は、筆者（小橋）が平成二十二年（二〇〇九）に、弟小橋豊平より父小橋貫一の形見として譲り受けた文書群の一部である。この文書群は三つの封筒に袋詰めされた次の一四点からなる。なお各封筒には、アルファベットと丸数字からなる文書番号が冠された文書名が黒のペンで表書きされているが、ここでは、文書名については原文書の表題を用い、それがない場合には「」で内容に即したタイトルをつけ直し、さらに宛名／作成年月日と作成者を（ ）に記している。

A―①「大正八年四月出征大正九年十月帰還命令（部隊ハ十月十六日哈府停車場を出発ス）西伯利出征紀念帳」（派遣軍第一四師団歩兵第五九聯隊第一一中隊第一小隊 小橋貫一）

B―①「尼港戦闘ノ状況」（電信隊独立大隊工兵一等卒 香田昌三）

②「亜港」（大正二十一年一月 軍政部 吉田信治）

③「陣中日誌 シベリア派遣」(歩兵第五九聯隊第一中隊第一小隊 小橋貫一)

C―①「郵便部臨時雇員辞令」(小橋貫一／大正一二年五月一九日、薩哈噠州派遣軍郵便部)

②「学業勉勵ニ付」褒状」(第二年 小橋貫一／大正三年三月二三日、栃木県立栃木中学校)

③「卒業証書」(第三九四号) (栃木県平民半次郎長男 小橋貫一 明治三二年五月五日生／明治四五年三月二三日、栃木県下都賀郡栃木町栃木尋常高等小学校訓導 森竹松)

④「手工科成績優良ニ付賞品授与状」(栃木尋常高等小学校尋常科第六学年 小橋貫一／明治四四年一月一四日、栃木町児童成績品展覧会長 望月磯平)

⑤「精勤賞」(尋常科第六学年 小橋貫一／明治四五年三月二三日、栃木尋常高等小学校)

⑥「優等賞」(尋常科第六学年 小橋貫一／明治四五年三月二三日、栃木尋常高等小学校)

⑦「室長任命状」(尋常科五学年 小橋貫一／明治四三年四月二二日、栃木尋常高等小学校)

⑧「優等賞」(尋常科第五学年 小橋貫一／明治四四年三月二四日、栃木尋常高等小学校)

⑨「精勤賞」(尋常科第五学年 小橋貫一／明治四四年三月二四日、栃木尋常高等小学校)

⑩「修業証書」(栃木県平民半次郎方平民 小橋貫一 明治三二年五月五日生／明治四四年三月二四日、栃木県下都賀郡栃木町栃木尋常高等小学校長 小堀芳三郎)

このうちA―①は、「西伯利亚出征記念写真 小橋貫一」と墨で書きさされ、裏面に「産業機械統制会」(東京都麹町区大手町二丁目八番地ノ一機械工業会館内)と印刷された角形3号とほぼ同じサイズの大形茶封筒に入っていたもので、絵葉書一〇五枚をはじめ、ロシアの紙幣や切手および本人・戦友などの写真を、方眼紙に糊や絵葉書の四隅が差し込めるように切り口を入れるなどして貼り付け、一冊に編綴した縦二三センチ×横一八センチの簿冊である(写真1参照)。

Bの文書群は、「アテネ株式会社」(大阪市天王寺区生玉前町24番地)と印刷された、角形2号の黄色封筒に入られていたもので、

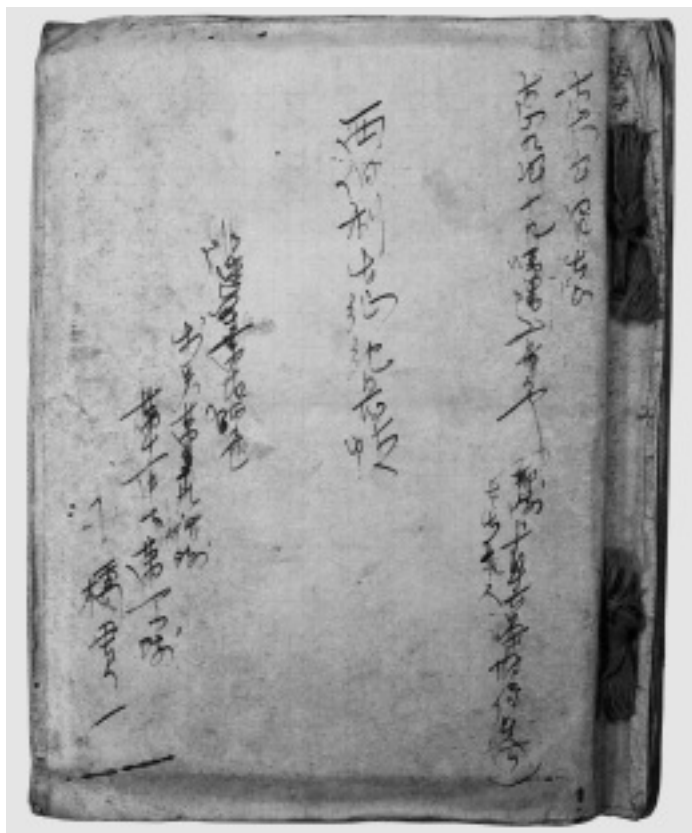


写真1 「西伯利出征記念帳」

①と②は謄写版である。このうち①の「尼港戦闘ノ状況」(縦二四・二センチ×横一六・八センチ)は、大正九年(一九二〇)三月に貫一と同じ第一四師団隷下の歩兵第二聯隊(水戸)第三大隊がパルチザンとの戦闘で「全滅」した第一次尼港(ニコライエフスク)事件で俘虜となり、第二次尼港事件のさなかの五月二五日に殺害された工兵一等卒香田昌三の日誌で、遺留品のなかから発見されたものである。この謄写版がいつ誰によってどのような目的で作成・配布されたのかは現在のところ不明であるが、歩兵第二聯隊が貫一の所属する歩兵第五九聯隊と同じく第一四師団の隷下部隊であったことが関係していると推測される。本資料については他日稿を改めてその詳細を紹介したい。

B―②の『亜港』(縦二三・五センチ×横一六・八センチ)は、日本が尼港事件の報復措置として占領した北樺太(北サハリン)の中心都市・亜港(アレクサンドロフスク)サハリンスキー)の沿革や風俗・習慣・宗教などについて記した冊子である。著者の吉田信治については現在のところ不明であるが、

軍政部とは同地の占領と軍政実施のために同年七月に編成された薩哈噠州派遣軍に属する組織である。ちなみに北樺太を薩哈噠(サガレン)と称したのは、南樺太が日露戦争の講和条約として結ばれたポーツマス条約によって日本の領有となつて以来、「樺太」となつたため、これと区別する必要があつたことによる。この『垂港』は、その内扉に「薩哈噠ノ地ヲ踏ミ垂港一般ノ事情ニ通ツルコトノ肝要ナルハ言フ俟タス」とあるように、日本の占領を円滑に行うために作成されたものであるといえよう。貫一は、大正一二年五月に薩哈噠州派遣軍郵便部の臨時雇員となつて(C―①参照)ので、その関係で入手したものと推測される。ただし本資料は五七頁以下が落丁している(目次で確認できる最終頁は二二頁)。

本稿で紹介するB―③の「陣中日誌 シベリア派遣」(縦一〇・二センチ×横一五・九センチ)は、茶と白の格子柄の布製表紙を持つ横罫紙一九行のノートで、縦書きで使用されている(一〇一頁の写真3参照)。表表紙の見返しの横方向に「陣中日誌 シベリア派遣」と横書きされ、さらに裏表紙の見返しの縦方向に「歩兵第五十九聯隊 第十一中隊第一小隊 ルー三九 小橋貫一」と縦書きされている。記述には、少なくとも三種以上の青もしくは黒インクが用いられ、大正九年二月一四日より鉛筆がこれに加わる。

本文は、貫一が所属した歩兵第五十九聯隊においてシベリア行きの噂が流れた大正八年三月二四日から翌年二月二九日にザバイカル州のカリムスカヤ(筆者註・参謀本部が編纂したシベリア出兵の戦史である『西伯利出兵史』の表記ではカルムイスカヤ。以下これに倣う)駅を出発、アシドソアシフカ(アドウリアーノフスカ)駅に到着し、翌日――原文によれば二月三〇日――俸給を受領した記事で終わっている。のちに述べるように、同聯隊の復員完結は大正九年一月三日であることから、三月初旬から八カ月余りの記録が存在しないことになる。日誌が書き継がれなかったのか、あるいは紛失したのか、定かではないものの、「陣中日誌」それ自体は、二月二九日の記事の次頁から種々の人名表などが掲載され、一応完結した形となっている。また日誌は、本文冒頭に「シベリア出征ニ就て(日誌及所感)」とありながら、出征が確定していない三月二四日から書き始められている。その筆致は、最初の欄外書き込みが登場する四月二一日前後から明らかに乱雑になっており、さらに必ずしも統一されていないものの、日付と天候の記入後、改行されてその日の出来事が記される形になることから、この時点、すなわち軍務に比較的自由があったと考えられる船上において記憶を頼りにそれまでの経緯が記され、以後は文字通り日誌の形でほぼ逐日書き継がれていたと推測される。

Cの文書群は、表面の上部に「高等学校長殿「気付先職業指導主事」」(ペン書きで宛名書きあり)、下部に「栃木県宇都宮市西原町2798の1 自衛隊栃木地方連絡部」のスタンプが押された中型の茶封筒に入っていたもので、証書や辞令の類がまとめられている。ただし、残念ながら、「軍隊手帳」など貫一の軍歴を詳らかにしうる資料は、すでに散佚してしまったようである。

二 小橋貫一という人物

以上の文書群から判明する生年月日・学歴・軍歴・職歴を、参謀本部が編纂したシベリア出兵の戦史である『西伯利出兵史』の記述⁽¹⁾、さらには筆者(小橋)の記憶で補い、小橋貫一の略歴を記せば、次のようなものとなる。

明治三二年 五月五日 小橋半次郎・リセの長男として栃木県下都賀郡栃木町に生まれる

明治四五年 三月二三日 栃木町栃木尋常高等小学校尋常科卒業

明治四五年 四月 栃木県立栃木中学校入学

大正三年 陸軍幼年学校を受験するも失敗し、中学校を第二学年で中退、東京浅草の乾物店に奉公に出る

大正六年二月一日 満一八歳で現役志願、第一四師団隷下の宇都宮歩兵第五九聯隊に入営

大正八年三月三十一日 動員下令

大正九年二月三日 復員完結

大正一二年五月一九日 薩哈噠州派遣軍郵便部臨時雇員

同年 菅原トキと結婚

大正一四年五月 北樺太亜港より南樺太泊居支庁管下の名好郡恵須取村に移住。妻の実家の呉服店を手伝う

大正一四年二月一日 長男宗一郎、生まれる

昭和二年 次男豊平・三男建蔵、生まれる

昭和四年二月 四男誠治、生まれる

昭和六年四月 五男章吾、生まれる

同年頃 満州黒龍江省に渡り、軍隊の駐屯地で御用商人を営む

昭和二年頃 トキと離婚

昭和十二年一〇月 満州黒龍江省にて病没(享年三八歳)

大正六年(一九一七)に、満二〇歳の徴兵適齢前にあたる満一八歳で現役に志願したと判断したのは、大正八年四月七日の動員完結に寄せて「去年、現在教育されたる者に今年は先達者だ。又嬉しいと思つた」との感想を述べていることや、九月二〇日と二一日の条に自らを「二年兵」と称していることによる。この志願は、徴兵令第一二条に基づくもので、一般に農家の二三男など将来下士として軍隊で生活の糧を得ようとする者が選択する道であつた。ちなみに一二月一日は当時の入営期日である。なお大正九年一月三日の条に「男トシテ生レテ男ヲ知ツタ廿二才の春早く」とあるのは、貫一が当時の社会通念にしたがい、自らの年齢を数え年で認識していたことを示す。

小橋家は、平民の族籍で指物・建具商を営み、祖父は師範学校を中退した後、日清戦争で軍夫の小隊長として台湾に従軍した経験を持つという。また、貫一が結婚したトキの実家は、元々石川県鳳珠郡穴水町で農業を営んでいたが、明治三十九年(一九〇六)に小樽を経由して南樺太の真岡に移住し、貫一がトキと知り合った当時、日本が占領していた北樺太の亜港で呉服店を開業していた。一家は、大正一四年一月の日ソ基本条約の締結にともない、間宮海峡に注ぐ恵須取川河口に位置する恵須取村に移り住んだ。このとき亜港在住の日本人の三割が同村に移住したという。村は、丘陵をはさんで港湾を中心とする浜市街と大平炭鉱を中心とする山(手)市街とに区画されていた。このうち浜市街は、南浜町・本町・北浜町からなり、一家が店を構えた本町四丁目はその中心に位置していた。

恵須取村は、大正一三年末現在で戸数五三一戸(うち内地人四八七戸・朝鮮人三九戸・アイヌ二戸、支那人三戸)・人口三〇九〇人(うち内地人二六二八人・朝鮮人三五二人・アイヌ八人・支那人一〇二人)に過ぎなかったが、翌年一二月に樺太工業(昭和八年五月に王子製紙・富士製紙と合併し、王子製紙となる)が同村山市街に製紙工場を開業したことで発展の基礎が築かれる。昭和二年(一九二七)には町制が施行され、さらに昭和四年七月に施行された樺太町村制で二級町村となり、真岡町と並ぶ樺太西海岸の中心の都市として、昭和一六年末には七一五九戸(うち内地人六六六六戸、朝鮮人四九三戸)・人口三万九〇二六人(内地人三万五七二一人、朝鮮人三三〇二人、外国人三人)を数え、この時点で唯一市制が施行されていた豊原市の七三三七戸・人口三万七一六〇人を上回る樺太唯一の人口を誇るまでに急速な発展を遂げることとなる。⁽³⁾この当時、浜市街は、日本海に沿って南北に伸びた海岸通りに主に商店街、山よりの街路には料理屋やカフェーが建ち並び、七・八月には海水浴客でいつも賑わいをみせた。

貫一は、残された賞状類から判断するに、尋常小学校の高学年から中学校にかけて真面目で学業優秀な児童・生徒として過ごしたようである。とくに中学校―高等学校・大学予科―大学という男子にのみ開放されたエリートコースの登竜門に位置し、近代を通じて進学率が一割にも満たなかった中学校に進学していることは、貫一少年の優秀な成績を物語っている。それと同時に、必ずしも裕福であったとは思われない小橋家が長男を中学校に進学させたのには、そうした貫一に対する父母の期待の大きさがあつたからであろう。このことは、シベリア行きの噂が出て以来、二八日に父が、三一日には母が面会に来たのを皮切りに、「交代く／＼五回も十日頃迄に来た」という事実、あるいは貫一がコサツク兵との意思の疎通を可能とした英語力を「父母の恩」(五月三一日の条)と自覚していることから裏づけられる。

貫一は、こうした父母に対し、「朝鮮人は〔中略〕老婆を大切にす。非常に感じた」(六月六日の条)、「支那人の老者を大切にする事と、タバコで野菜食ツタ事ハ喜バシカッタ」(六月一〇日欄外)といった朝鮮・中国人に対する共感のありかたにみられるように、強い孝行の念を抱いていた。それゆえに貫一は、父母の恩と自らの夢とのあいだで煩悶することにもなった。大正八年五月二二日の条には次のように認められている。

昨夜、酒保ニ於て浪花節を聞タ。伊東巳代治氏の立身頓才談、語学に精通して居るを聞て、自分もつらく生来の事を考た。煙草を断然よして語学を研究する必要とする。彼も人なり、我も人なり、如何かして僕も社会的人物になりたいが、貫一否一貫は此ノ辺に存するのである。而し親の喜も考なきやならん。床ニ就て、実に考た。

おそらく貫一の胸中には、このとき「露国立身問題」(九月一日の条)、すなわち現地除隊によるロシア残留の計画が次第に具体化しつつあった。そもそも軍隊に志願したものの、「今迄除隊く」と早勸定ばかりして居た「貫一」が出征の報に接し、「喜びは一方なら」(三月二四日の条) なかったのも、シベリア行きを立身出世の好機ととらえていたからにほかならない。その念は、大正九年二月六日には、「残留の確悟も確まつた。明日より煙草止めて、一増勉強せよ」との決意となつて現れ、「西伯利出征記念帳」(A—①)の最初の頁に、家族や親類縁者に向けられたと思しき、次のような「舌代」を認めさせることになつたのである。

一、大正八年四月出征以来茲二十有八ヶ月今回愈々師団凱旋命令出ズ、今迄極東三洲ハ勿論滿洲を横断して九月一日再ビ哈府(ハバロフスク)ニ来リテ見レバ市街戦ノ打撃を蒙リ実に惨情ヲ呈シテ居マシタ

二、此ノ繪葉書ハ各地ニ於テ買求メタルモノニシテ、古人ノ言葉ノ通り「百聞ハ一見に如カズ」ト在ルガ、繪葉書を御覽ニ入レテ此方ノ情况ヲ御察シ下サイ、又紀念トナルベキモノトモ思マシタガ、本人ガ帰ラナキヤ持つて行事も出来ズ、只々皆サンノ御心慰サメルバカリニ

子供等ガヨゴシタリ或ハ他人ニ与シタリスル事ナキ様特ニ注意して下サイ

大正九年十月二日

於哈府兵舎

貫一記ス

シベリア派遣部隊の現地除隊については、大正八年二月一九日の陸達第五号により、「今回ノ派兵ニ於テ西伯利ニ在ル部隊ニ属スル軍人ニシテ内地帰還後直ニ召集解除又ハ現役満期ト為ルヘキ者ノ中西伯利ニ於テ確実ナル職業ニ従事セム為該地ニ残留ヲ希望シ部隊長ノ承認シタル者ハ各其ノ所属部隊ノ現在地ニ於テ召集解除又ハ現役満期ノ手続ヲ為スコトヲ得」と定められていた。貫一は、大正九年一月三〇日で現役満期に達するので、その条件をほぼ満たしていた。^⑤

しかし、すでにシベリアは、貫一が「社会的人物」たりうる条件を失いつつあった。大正九年一月四日、シベリアにおける反革命政権の中心であった、オムスクのコルチャーク政権が崩壊したのを契機として、各地の白軍(革命軍≡赤軍)に対する反革命軍の総称)は総崩れとなり、ニコリスク・ウスリースキー・ハバロフスク・ニコライエフスクといった沿海州北部の諸都市も革命派勢力やパルチザンによって占領される。^⑥浦塩派遣軍は、この動きに一時中立の姿勢をとったが、四月四日深夜にウラジオストクの革命軍に対して武装解除を断行したのを皮切りに沿海州のすべての日本軍駐屯地で総攻撃に出た。とくにハバロフスクとニコリスク・ウスリースキーでの戦闘は大規模で、「舌代」のいう「惨情」とはこのときの戦闘によるものであったと推測される。しかし同月六日、ソビエト政権が日本のシベリア出兵に対処すべく、ザバイカル州で極東共和国を建国すると、浦塩派遣軍は七月一日にこれと停戦協定を結び、同州から撤退、ついで一〇月には貫一ら第一四師団隷下部隊を最後にハバロフスクをはじめとする北部沿海州からも撤退し、戦線をウラジオストクとその周辺地域に縮小した。さらに大正十一年一〇月には、シベリアからの完全撤退が実現するのである。

「陣中日誌」のゼーヤ撤収の際の記述にみるに、貫一がこうした状況にまったく無頓着であったとは思えない。すでにみたように、二月六日にいったんは残留を決意した貫一も、二月一日になると、「是非一番全^(安脱カ)な所に引上げたいものだ。余の露国残留の念□□□心配セラル、様な有様である」と記しているからである。結局、貫一は当初のシベリア残留を翻意し、帰還部隊に帯同してウラジオストクまで移動し、同地で除隊後、北樺太に渡ったか、あるいは「舌代」の口上とは異なり、帰国したかのいずれかであったろう。少なくともハバロフスクに残留した可能性は皆無である。

貫一は、中学校在学時の陸軍幼年学校の受験、満二〇歳の徴兵適齢前にあたる一八歳での陸軍現役志願、日本の勢力拡大にともない北樺太、さらには南樺太を経て満州へと移住し、同地で客死しているように、見果てぬ夢を追いつけた人であった。そうした人生

のなかで、恵須取時代は、町の発展と相俟って、妻を迎え、五人の男の子に恵まれるなどもっとも安定した時期であった。この頃の貫一は、妻の実家では良い働き手ではなかったものの、筆者（小橋）に「橋大隊長」「歩兵の本領」「日本陸軍の歌」をはじめとする軍歌をよく歌ってくれるなど、当時としてはめずらしく子どもの面倒をよくみる父親であったようである。ここには、「陣中日誌」の内容からも類推しうる貫一の人間的な優しさがうかがえる。

しかし貫一は、己の才覚に対する自信から、妻の実家を手伝うという生活に不遇を託つていたとの思いを捨てきれなかったであろう。それが、昭和四年五月の山火事によって山市街が灰燼に帰したことに加え、昭和恐慌の影響による町全体の不景気と相俟って、貫一に死地となる大陸行きを決意させることとなったのである。貫一は、トキと子どもたちを連れて満州に渡ることを望んだようだが、トキの母が生活の基盤ができたと呼んで欲しいと家族の同行を頑なに拒んだという。満州では、陸軍の御用商人を営み、一時は仕事も順調だったというが、トキには一銭の仕送りもなかった。

小橋貫一の一生は、このように「社会的人物」たらんとの思いに憑かれた生涯というべきもので、身分制を解体することで「立身出世」の夢と幻想を生み出した近代という時代に翻弄された民衆の姿を浮き彫りにしている。

三 「陣中日誌」にみるシベリア出兵

シベリア出兵は、チェコスロバキア軍救援を出兵目的に掲げた大正七年（一九一八）八月二日の出兵宣言と第二師団（久留米）の動員、翌日の浦塩派遣軍司令部の編成によって始まる。ついで八月九日に第七師団（旭川）に、二四日には第三師団（名古屋）に相次いで動員が下令され、この三個師団によってわずか一カ月足らずのうちに沿海州・アムール州（黒龍州）・ザバイカル州の極東露領がほぼ制圧された。しかし翌年に入ると、革命派勢力がバルチザン戦を開始したことで、戦争は泥沼の様相を呈しはじめる。二月には、「過激派討伐」に向かった第二師団隷下の歩兵第七二聯隊第三大隊（田中大隊）がアムール州のアレクセーエフスカ北方のアムール鉄道ユフタ駅付近の戦場でバルチザンに包囲され、全滅するという事件も起きている。これ以降、第二師団は、「村落

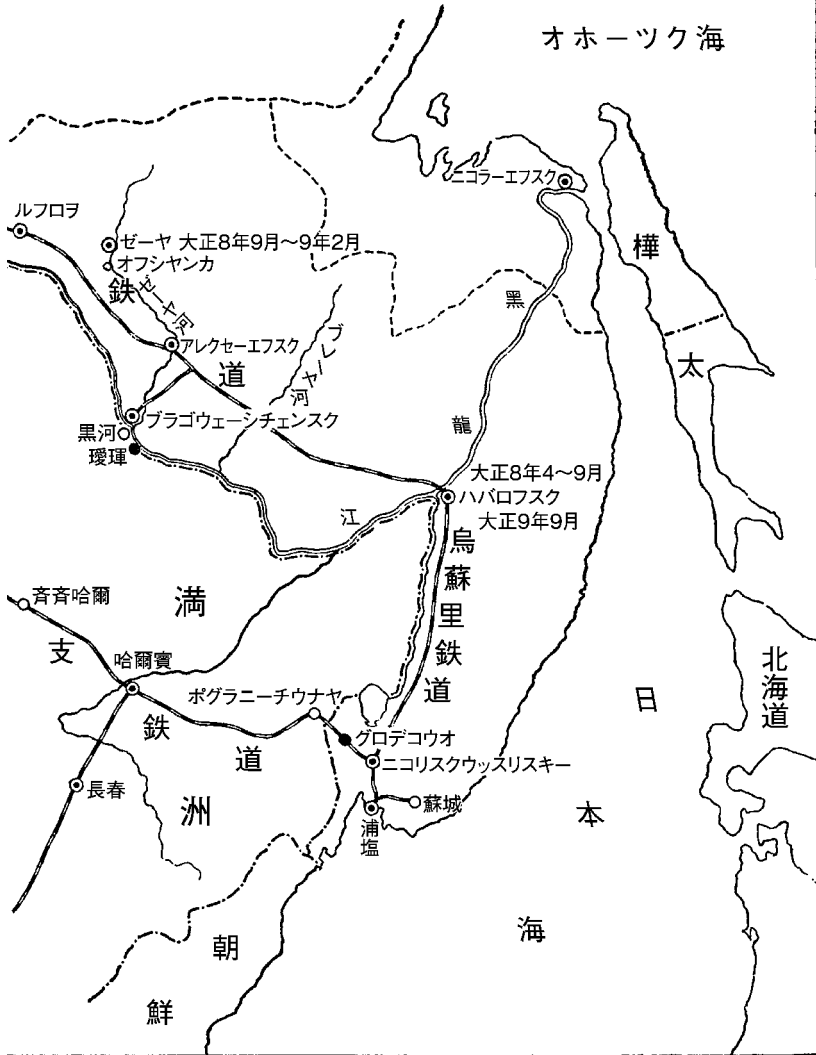
焼棄」の方針を掲げ、のちに貫一ら歩兵第五九聯隊が駐屯することになるアムール州ゼーヤ河地区を中心に、パルチザンに対する徹底的な討伐戦を実施していく。^⑦

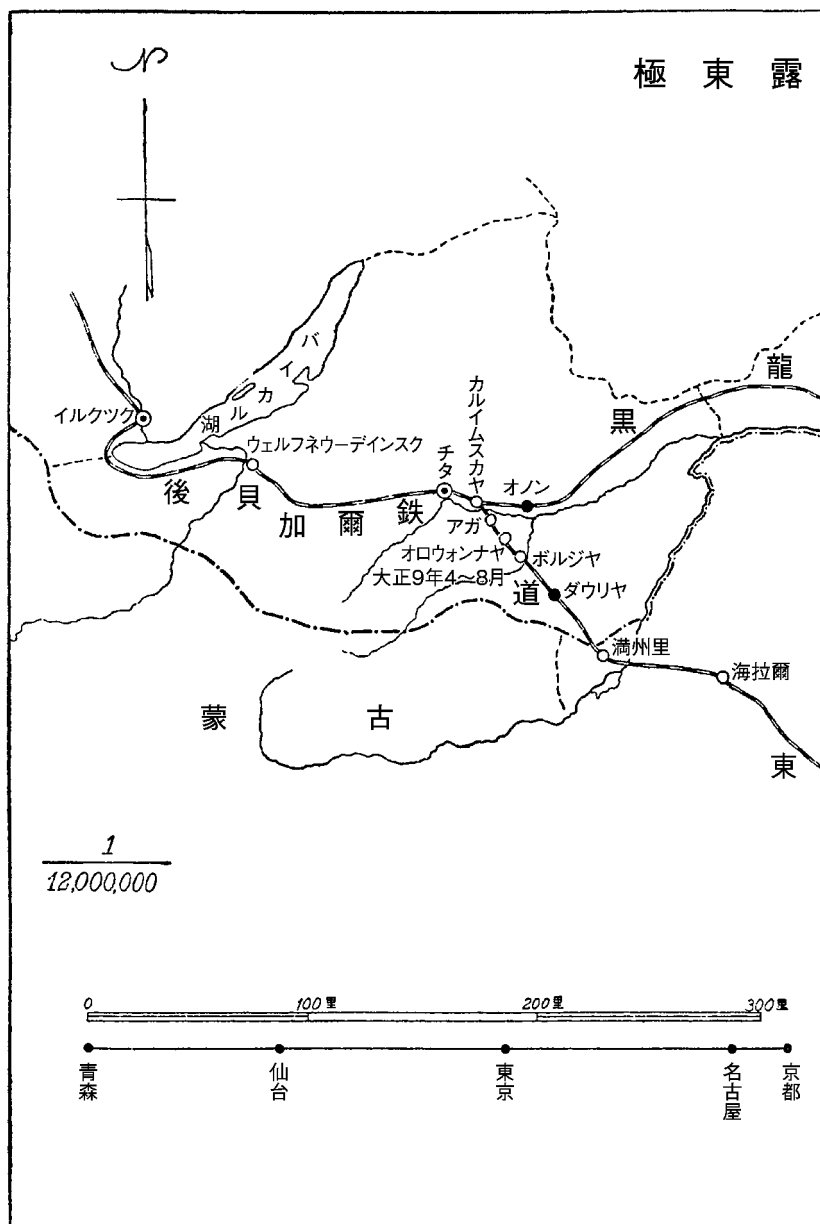
第一四師団の動員は、この討伐戦が将来の日露関係に禍根を残すことを懸念した政府と陸軍省が第一二師団の早期帰還を求めたため実施に移されたが、アムール州の討伐戦が兵力の不足によって十分な効果を挙げていない状況の下で、前年の出兵にさいしその候補師団と予定され、若干の準備が行われた第一四師団を速やかに派遣して第一二師団と「重複駐屯」させることで、「討伐ノ効果」を挙げることが参謀本部によって期待されていた。しかし第一二師団の帰還時期は、閣議決定の関係から、第一四師団の到着後一カ月以上遅延させることができない状況にあった。第一四師団はシベリア到着後、従来第一二師団が担任した区域の約半分(北部沿海州とアムール州のビカライ・クンドウール線以東の地区)の守備を担当したが、第一二師団によって続行された討伐戦が「後累ヲ剪除スルニ至ラサル間」に重複駐屯が可能で一カ月が経過し、五月一三日の浦塩派遣軍の命令によって六月上旬より帰還の途についたため、これ以降約一年間にわたり、沿海州北部と黒龍州全域をほぼ単独で担当し、パルチザンとの戦闘を繰り返すこととなる。^⑧

出征当時、小橋貫一は、第一四師団隷下の第二七旅団歩兵第五九聯隊第三大隊第一一中隊に所属していた。シベリア行きの噂が出たのは三月二四日のことで、「僕の喜びは一方ならず」と記している。翌日には、伍長勤務上等兵が各中隊一人ずつ残るといふ話に落胆するが、恐らく人事掛であった特務曹長や中隊長らにシベリア行きを直訴した効果があつてか、二八日にその特務曹長から「小橋は行けるから安心しろ」と言われる。三一日には中隊長より動員下令の正式な発表があつた。歩兵第五九聯隊は、将校六三人、准士官以下一七九人、非戦闘員五七人、合計一九一九人、馬匹四四の準平時編制で動員される。^⑨

四月一五日には先発として仙台へ向けて出発。四月一八日に青森着、三日間滞在したのち、二一日に師団第二船団として吉田丸にて青森港を出航し、二三日ウラジオストクに到着。二五日同地を発し、ウスリー鉄道を北上、ニコリスク・ウスリースキー(同日)、イマン(二六日)、ビキン(二七日)、ウイズルスカヤ(ウヤーゼムスカヤ)(同日)を経て、二八日ハバロフスクの兵舎に入り、第一二師団隷下部隊と交代、同市の警備にあたる。これ以後、貫一の中隊は、沿海州ハバロフスク(大正八年四月〜九月)、アムール州ゼーヤ(同年九月〜大正九年二月)、ザバイカル州オロウオンナヤ(同年四月〜八月)と極東三州を転々としていく。貫一は、大

領 概 見 図





(六九)

典拠：菅原佐賀衛『西伯利出兵史要』(1925年)をもとに一部修正。

正九年九月にオロウオンナヤから満州里―ウラジオストク經由でハバロフスクに帰還しているので、この間、ウスリー(烏蘇里)鉄道・アムール(黒龍)鉄道・ザバイカル(後貝加爾)鉄道・東支鉄道のうち、ザバイカル鉄道カラムイスカヤ以西の区間を除く全区間を走破したこととなる(「極東露領概見図」参照)。

ハバロフスク駐屯中の五月一〇日には、中隊長より、「露人ノ性質ニ就て」「英国軍司令官の事件ニ就て」「チタ方面の事件鉄道守備ニ就て」「十三師団の時計事件」「過激派に就て」「家屋防禦ニ就て」の各項目にわたって訓示を受けている。このうち過激派、すなわち革命派勢力のバルチザン戦法については、次のように注意されている。

伏兵を使フコト非常に多し、側方の特ニ注意スルヲ要ス。欧州戦場の実験ヲ得た物非常に多い。固人ノ部の戦争ニ上達す。特種の技能(斥候射撃)ニ上達スルモノアリ。戦闘は心ず隠隊ヲ作り側方よりまわす。全て林は密林にて通視は困難なり。凹地は湿地とす。かやが多い故根を渡つて行進するか、巡察斥候の時にはカヤを持つてみを作つて行事。特に予備の弾薬の盗まれに注意する。兵器弾薬に注意する事。隊とくとの連絡を断たざる事。大小行李ニ付テ行時等注意スルコト。家屋ヲ利用して戦争スルコト。非常なる抵抗を有す。間諜ヲ良ク利用する故、支那人・朝鮮人に注意せよ。針金ぎょうとう、或は通常ぎょうとうが多い。昼夜共断全単独は禁す。

貫一ら兵士は、動員下令にあたり、「要するに出征するのはロシアを助けに行のたと言ふ事である」と出兵の目的を説明されていた(三月三二日の条)。しかし訓示は、「郷に入つては郷に随へ。土地に習慣を尊重す、而已」(英国軍司令官の事件ニ就て)と、現地の習慣を重んじることで住民との軋轢を避けようとする配慮もうかがえるとはいえ、「金ヲ以テ働ク人間なり」「恩を思わない」「虚言を言ふ事甚シ」(露人ノ性質ニ就て)等々、ロシア人が信用できぬ人間であることを強く印象づけるものとなっていた。それゆえに兵士は、家宅捜査をはじめとしてロシア人民家に入る場合にも、「着剣は成るべくさける。着剣セザル時は必ス装填スルコト。而し戦争の時此の限り非す」(「チタ方面の事件鉄道守備ニ就て」といった矛盾に満ちた行動を迫られたのである。しかも家宅捜査

にあたっては、ロシア人を「品物を盗む平気なる習慣あり」(十三師団の時計事件)と批判しておきながら、「総て物を持つて来ざる様に」(チタ方面の事件鉄道守備ニ就て)と兵士に戒めねばならないほどに、日本軍による略奪行為が横行していた。⁽¹¹⁾「ロシアを助けに行」と称しながら、民衆に支持されたパルチザンとの戦闘に直面せざるをえなかった日本の軍隊の矛盾が露呈している。貫一らの中隊がオフシヤンカ駐留中に民間人を誤って射殺し、埋葬金として五〇〇〇ルーブルを支払う事件を引き起こしたのも、いわば「人民の海」(毛沢東)に孤立した兵士たちが疑心暗鬼に駆られていた結果にほかならない。⁽¹²⁾(一〇月二八日欄外・一一月二日の条・六日欄外)。このため、実際のパルチザンとの戦闘でも、貫一ら歩兵第五九聯隊と同じく第一四師団に属した歩兵第二聯隊(水戸)の帰還下士が、シベリアの「敵情」について、「頗る危険状態にして露人の過激派なるや否やを明瞭に判別すること能はず。されば委く露人をば過激派と見做し相当の処置をとれり」と回顧したような村の掃討戦が繰り広げられていくのである。

しかしながら、小橋貫一という人物は、自らが参加した家宅捜査について、「可愛さうなのがあつた。ぶる／＼振つたから、あゝ人間人間まして何等の変わりも無い。同情生ず」(五月三二日の条)と記しているように、ロシア人に対しても民族や国籍を越えて一個の人間として接しうる感性を備えていた。パルチザンについて、「間諜ヲ良ク利用する故、支那人・朝鮮人に注意せよ」と訓示されながら、老人を大切にする彼らに共感の念を表明していることも、すでにみたとおりである。件のロシア残留計画には、単なる出世欲のみならず、こうした貫一の人間の資質が深くかわつていたといえよう。

五月一四日、第一四師団は、第一二師団との交代に関する浦塩派遣軍の命令と交代要領を受領し、二二日に東部旅団(長歩兵第二七旅団長)・西部旅団(長歩兵第二八旅団長)・師団直轄部隊の軍隊区分を定め、あわせて第一二師団と交代してその行動区域の警備に任ずること、およびプレーヤ河を境界として東側を東部旅団、同河を含む西側を西部旅団の担任区域とし、両旅団は区域内の警備と鉄道の保護に任ずること、ニコラーエフスク守備隊は前任務を継続すること、師団直轄部隊はハバロフスクに駐屯すること、を各部隊に命令した。貫一の所属する歩兵第五九聯隊は師団直轄部隊としてハバロフスクに駐屯することとなった。⁽¹³⁾

ハバロフスク滞任およそ一カ月を経て、貫一は初めての、それも出征中唯一の大規模な野戦を経験する。四月下旬にハバロフスク南方ホールル河上流にあつたパルチザン約七〇〇の行動が活発となり、逐次鉄道沿線に進出し、五月二九日には歩兵第五九聯隊のホー

ル守備隊に來襲するに至ったからである。⁽¹⁵⁾翌三〇日、貫一は第五九聯隊長松尾伝蔵大佐を指揮官とする松尾支隊の左縦隊としてホル河谷の掃討戦に出動するためハバロフスクを出発し、シベリア鉄道を南下、オチウエルノ〔ウエーリノ〕停車場に到着し、キヤ河畔で宿営。三十一日に同地を出発し、エゴロフカ〔エコロフカ〕、六月一日マルシー〔マールシ〕を通過し、ジューコフカ〔ジウコーフカ〕で宿営。二日タバン〔朝鮮部落〕を通過し、ビジバヤに宿営。四日ビジバヤ出発、タバン着。八日ポルトノイ〔ポリョートウナヤ〕着。九日マルシナ〔マールシ〕経由でソゴロフカ〔ソコロフカ〕に宿営。一〇日キヤ河沿いにウエルノウ〔ウエーリノ〕に帰還した。翌日、貫一は、自らの生還を「行軍中壯健デアツタ事ハ、父母の爲カ、天祐カ、神助カ、何より喜バシ」と記す。一三日、ハバロフスク郊外にあるクラスナヤレーチカの兵営に移った貫一は、この初めての野戦体験を己の生きた証として「ホール・キヤ河所附近討伐地要図」に残している。これ以降、貫一の部隊はアメリカ軍と交代し、ドイツ・オーストリア・ハンガリー軍俘虜の監視にあたっている。

九月一五日、第一四師団は、同師団の行動地域をアムール・ザバイカル両州界まで拡張すべく、第三師団の一部と交代してゼーヤ・ウシムン付近にその隷下部隊を配備させる浦塩派遣軍の命令を受け、ハバロフスクにある歩兵第五九聯隊主力をもつて松尾支隊を編成し、これをウシムン・ルフロウオ・ゼーヤ市の各部署に派遣する命令を発し、さらに二一日には、同支隊を西部旅団の隷下に編入する新たな軍隊区分を定めた。⁽¹⁶⁾これにともない、貫一の所属する第三大隊も、九月一一日にゼーヤ方面移動のためハバロフスクを出発し、沿海州との州界である黒龍鉄橋をわたってアムール鉄道を西に進み、ビラ駅に到着。アルハラ(二〇日)・ポレカチオ(ポチューカレウオ)(二一日)を経て、二二日にアレキセイフ〔アレクセーフス〕に到着。翌日、同地より汽船にてゼーヤ河を北上、二七日にゼーヤに到着した。なお、九月一九日から二〇日にかけてハバロフスクを出発した松尾支隊は、途中過激派の鉄道橋焼却にあい移動を遅らされているが、貫一もその跡を目撃している(九月一九日・二一日の条)。当時のアムール州の状況は次のよう⁽¹⁸⁾なものであった。

第十四師団か此方面〔黒龍州〕の守備に移った前後から敵は全く其作戦計画を一変したらしく、正々堂々日本軍と戦つた処で到

底勝つ見込はない、「バルティザン」的戦法で到る処鉄道を破壊し電線を切断して日本軍を個々に孤立せしめ、機を得て各個に之を攻撃しようと云ふ考を採つたものと見え、此(大正九年の)六、七月頃から盛に鉄道橋を破壊し電線を切断し始め、多い時には一夜に五十箇所も鉄道橋の破壊せられた事もあると云ふ風であつて、我軍は櫛風沐雨朝に一橋を修むれば夕に三橋を失ひ之か応援の爲東奔西走する有様であつた

加之敵は此交通杜絶の責を日本軍に帰し、物資の欠乏は日本軍が居るからであると言ふ風に宣伝し、盛に農民の反日本感を煽り、且各地の我守備隊が孤立して居るのに乘し之に對し攻勢を取ると云ふ有様であつた

〔中略〕

こんな有様で師団は日々鉄道橋や電信の修理に忙かしく、討伐の方に使用すべき兵力がないと云ふ有様である、此師団の守備区域は沿海州のビキン停車場附近から黒龍州のルフロウオの少し西迄である、鉄道線路に沿うて量つて凡そ三百里になる、三百里と言へは青森から東京を経て京都に至る距離である、此間を一師団で守備して居るのである、其上此師団は平時編成で出兵して居るので其出勤人員は多くも九千人迄であるので、師団は兵力の不足に苦しんで居たのである、然し跳梁跋扈に委せて置く訳には行かぬので師団は夏から秋にかけて大小数十回の敵の討伐を実施したのたか蠅を追ふ様なもので出れば逃げ帰れば又来ると云ふ風で何とも仕方なかつたのである、

そこで師団は到る処に兵を分けて置く方針を取つたので守備地の数か七十にも及んだのである、そうすると自然主なる点か手薄になる、此情況を見た過激派は黒龍州に於ける我本拠たるブラゴウエーシチェンスクを襲撃すべく其兵力をボチウカレウォ北方地区に集合し始めたのであつた

ゼーヤ駐屯中では、糧秣などを護送するため、ゼーヤ南西に位置するオフシャンカとの間を往復する日々を送りつつ、何度か戦友の死に際会している。とくに、二月二七日のオフシャンカ西方二里半の地点にあるザレチナヤ(サレヂナヤ)において、第三小隊の五人がパルチザンの待ち伏せに遭い、このうち三人が戦死した事件については、凄惨な戦闘の様子が詳細に記録されている。

表1 第14師団の戦死・戦傷死・戦傷者

区 分	戦死	戦傷死	戦傷	合計
将 校	21	3	17	41
准士官以下	497	36	314	847
軍 人 以 外	8	1	6	15
合 計	526	40	337	903

典拠：第十四師団長白水淡「上奏文」（防衛省防衛研究所図書館所蔵「大正十年二月 西受大日記」陸軍省－西受大日記－T10～2－49）

大正八年六月頃ヨリ九年ニ亘リ黒龍州及北部沿海州方面ニ於テハ過激派ノ跳梁跋扈甚タシク、各駐屯軍隊ハ何レモ之カ討伐鎮圧ニ従事シ多大ノ辛酸ヲ嘗メ志氣亦緊張セシモ、一方ニ於テハ挙動粗慢ニ流レ慰安ヲ酒色ニ求メントスルノ風アルハ自然ノ趨勢ニシテ皇軍ノ各地駐屯ニ從ヒ日本醜業婦ノ移住亦盛ンシテ急造ノ料理店ハ随処ニ建設セラレ、脂粉売笑ノ婦女ハ至ル処ニ瀰蔓シテ出征將卒唯一ノ慰安ヲ提供スルノ觀アリ、左レハ之等料亭ニ於テ軍紀風紀弛緩ノ因ヲナスアリ、或ハ敬礼態度紊乱ノ根ヲ醸スアリ、憲兵ハ仔細ニ其間ノ消息ヲ觀察シ以テ軍隊指揮官ニ連繫シ其警防ニ努メ、一面花柳病予防ノ為醜業婦ノ檢査ヲ試ミル等ノ処置ニ出テシカ、將校ニシテ娼婦ヲ数日ニ亘リ屢々宿舎ニ宿泊セシメタルモノアリ、料理店ニ於テ酩酊暴行ヲ敢テスルアリ、又タ下士以下他国兵ト酩酊ノ上争鬭スルアリ、或ハ狼リニ離隊遊興スルモノ等尠カラス、憲兵ハ常ニ之ヲ警戒、保護調停ニ従事セリ

(七四)

こうした討伐戦の繰り返しによる殺伐とした日々は、派遣軍の将兵を「酒色」に溺れさせていった。第一四師団の各駐屯地では、沿黒龍憲兵隊の報告によれば、次のような状況がみられた。⁽¹⁹⁾

表1は、シベリア出兵における第一四師団の戦死者・戦傷死者・戦傷者数をしめたものである。原資料には、師団編成定員に占める戦没・戦傷軍人の比率が一〇％にあたり、第二二師団の四・二％に比し二倍以上の多きにのぼる、と解説されている。⁽²⁰⁾ただし実数では、第二二師団が戦時編制の二万二〇〇五人（うち輜重兵第二二大隊三一四六人など戦闘に従事しない非戦闘員五七九八人）で動員されているのに対し、第一四師団は九〇一〇人（非戦闘員四五八人）の進平時編制で動員されているので、ほぼ同じとなる。⁽²¹⁾また『西伯利出兵史』には、大正七年八月の出兵開始から日本軍がザバイカル州と北部沿海州から撤退する大正九年一〇月末にかけての浦塩派遣軍司令部及其直轄部隊・兵站諸部隊・第三師団・第五師団・第七師団・第一一師団と第一四師団の入院患者数が、伝染病

及全身病・神経系病・呼吸器病・循環器病・栄養病・泌尿器及生殖器病・花柳病・眼病・耳病・外皮病・運動器病・戦傷・外傷及不慮・自殺の原因別に掲載した表が存在する。この表によれば、第一四師団は、大正八年一月から大正九年九月にかけて隷下部隊が逐次動員され、復員完結が表の集計後にあたる大正一〇年と大正一一年となる第一三師団と第一一師団を除けば、戦傷患者の比率が一一・二%と最も高く、花柳病患者の比率が七・六%と浦塩派遣軍司令部及其直轄部隊の八・五%について高かった。⁽²²⁾両者の因果関係は、駐屯地の状況に大きく左右されるので単純にはいえないまでも、第一四師団の将兵が果てのないパルチザンとの戦いに明け暮れるなかで、絶望的な人間回復の方途を酒と女に求めようとした結果であることは否定しえない。なお、浦塩派遣軍司令部及其直轄部隊の花柳病患者の比率が高いことは、駐屯地がウラジオストクという「極東西伯利中最繁華ノ都会」⁽²³⁾とその周辺であつたことに加え、軍司令部が腐敗していたことによる。⁽²⁴⁾

ゼーヤにも「女郎置屋」が存在したことは、同地撤収のさいの記事によって知られる(二月一日の条)。一九日にはザバイカル州へ移動中、娼婦二人が憲兵とともにパルチザンの鉄道爆破により死亡する事件が起きている(同月一六日の条)。また先の中隊長の訓示でも、「特二三等症(花柳病)に対しては注意すべし」とあり、ゼーヤ駐屯中にも軍医による花柳病の講話が行われていた(一月二二日の条)。

さらに「陣中日誌」には、貫一とロシア人住民との交流のみならず、女性関係をうかがわせる記述が散見する。「西伯利出征紀念帳」(A—①)には、「ゼーヤ市守備中の石川中尉殿のオナジミワリーヤさん 中隊長石川中尉殿より記念に」との但し書きがつけられた、ロシア人女性の写真も貼られている。こうした両者の交流は、貫一の人間の資質に負うところも否定できないとはいえ、一衛生兵としてシベリア出兵に動員された経験を持つプロレタリア作家・黒島傳治が「渦巻ける鳥の群れ」(『改造』昭和三年二月号に発表)において、「アナタア、ザンパン、頂だい」という冒頭の一句に集約した日本軍人とロシア住民との力関係がそこに大きく作用していたといえよう。⁽²⁵⁾

すでにふれたように、大正九年に入ると、コルチャーク政権の瓦解を機にハバロフスクをはじめとする沿海州北部の諸都市が革命派勢力やパルチザンによって占領される。第一四師団司令部が置かれていたアムール州の州都ブラゴヴェシチェンスクにおいても、



写真2 オロウォンナヤ町にて(右から2人目が小橋貫一)

(七六)

日本軍が一月一七日付の陸軍大臣の指示によって中立を宣言するなか、二月五日から六日にかけての夜にソビエト臨時執行委員会が権力を掌握した⁽²⁷⁾。貫一らの部隊が駐屯していたゼーヤにおいて、「過派が銃を持ち、胸には花を付けて、乗馬にて飛んで歩いて居る」(二月一四日の条)状況が生まれたのは、こうしたシベリア情勢の変化によるものであった。

二月一六日、第一四師団は、アムール州撤退に関する軍命令に接し、松尾支隊に対してザバイカル方面に移動し、第五師団長の指揮を受けることなどを命じた新たな部署を定めた。翌日、松尾支隊は、ザバイカル州カルムイスカヤへの移動を開始する⁽²⁸⁾。

かくして貫一の第一一中隊も、二月一九日オフシャンカを出発し、テグダ(トウイグダ)に宿泊。二二日同駅を出発し、アムール鉄道を西に向かい、二九日にザバイカル州のカリムスカヤ(カルムイスカヤ)駅に到着したが、命令により、いったんキタイスマイ駅まで戻って中国領満州里で東支鉄道に接続するザバイカル鉄道に入り、同日夜アシドソアシフカ(アドウリアーノフスカ)駅に到着している。すでに述べたように、日誌はここで終わっている。

その後、四月二三日からは、第一一中隊はアドウリアーノフスカよりさらに中国領に近いオロウォンナヤに駐屯し、九月一日にハバロフスクに帰還するまで同地の守備と鉄道の警備に任じていた⁽²⁹⁾(写真2参

照)。ただしこの間、五月二四日(あるいは二五日)に、一小隊がアガに配備替えになっているので、貫一がこの日以降同地に駐屯していた可能性もある。ちなみに松尾支隊主力は、四月二六日から五月五日にかけて、第五師団によるチタ付近の戦闘に参加し、一方面を担当しているが、第一一中隊はこれに参加していない⁽³¹⁾。

参謀本部は七月八日、同月二日の閣議決定に基づき、歩兵第一〇旅団のシベリア派遣と、ザバイカル州およびハルビン以西の東支鉄道沿線の守備の撤収、第五師団の内地帰還を浦塩派遣軍に命令した⁽³²⁾。派遣軍は一二日、第五師団に配属されていた歩兵第五九聯隊の原隊復帰を命じ、聯隊は八月二九日から九月二日にかけてザバイカル鉄道から東支鉄道―ウスリー鉄道經由でハバロフスクに帰着、九月一日の軍隊区分の変更をもって第一四師団長の隷下に復帰した⁽³³⁾。貫一のハバロフスク帰還が九月一日であったことは、すでに「西伯利出征記念帳」の「舌代」にみたところである。なお第一一中隊については確認できなかったものの、同日にハバロフスクに到着した部隊のオロウオンナヤ出発日は八月一九日となっている⁽³⁴⁾。

さらに参謀本部は九月一七日、ハバロフスク撤退に関する同月一〇日の閣議決定に基づき、第一一師団主力のシベリア派遣・第一四師団の内地帰還に関する命令を浦塩派遣軍に発した⁽³⁵⁾。第一四師団は、九月二五日に撤退開始の軍命令を受領し、一〇月二日ハバロフスク発の列車をもって撤退輸送を開始した⁽³⁶⁾。貫一の所属する第一一中隊はハバロフスクを一〇月一六日に出発しており、「西伯利出征記念帳」表紙の記載と一致する⁽³⁷⁾。中隊のウラジオストク到着は一八日のことである。第一四師団隷下の諸部隊は一〇月一日から一一月一日にかけてウラジオストクから乗船し、一〇月一九日から一一月五日にかけて宇品に上陸、一〇月二五日から一一月九日にかけて衛戍地に帰還している⁽³⁸⁾。歩兵第五九聯隊の復員完結は、すでに略歴に掲げたように一一月三日のことであった。

「シベリア出兵」という名の革命干渉戦争は、大正七年八月の出兵宣言から大正一一年一〇月の撤兵までの四年余のあいだに、延べ一〇個師団と一〇万人を超える人員を派遣し、約九億円の戦費と三〇〇〇人余の人命を失いながら、ソビエト民衆の反感と欧米列強の警戒心以外何もなかった「無名の師」であった。日本陸軍は、この戦争ではじめて民衆に支持されたバルチザンとの戦いに直面し、無残な敗北を喫したのである。その教訓が生かされなかったことは、太平洋戦争末期の昭和二〇年(二九四五)三月に中国山東半島に動員された筆者(小橋)が、中国共産党軍とのゲリラ戦において実際に体験したところである。

小橋貫一「陣中日誌 シベリア派遣」は、地を這う虫の視点によつて書かれた記録として、こうしたシベリア出兵のありようをよく伝えている。

(七八)

註

- (1) 歩兵第五九聯隊の動員下令と復員完結の年月日は、参謀本部編『秘 大正七年乃至大正十一年西伯利出兵史』(復刻)(中)(旧第三巻旧第四巻)(新時代社、一九七二年、原本の印刷は一九二四年)所収の附表第一(其三)「派遣部隊ノ編制、動員(編成)下令及完結月日及復員完結月日一覽表」(旧第三巻)による。
- (2) 樺太庁編『樺太庁治一斑』第拾七回(樺太庁、一九二五年)「26. 現住戸口細別」中の大正一三年末(一三頁)三七頁。
- (3) 樺太庁内政部総務課『秘 昭和十六年 樺太庁統計書』(樺太庁、一九四三年)「23. 現住戸口市町村別」昭和一六年末(二二頁)二三頁。外国人とは満州国人・中華民国人・旧露国人・波蘭人・独逸人・土耳其人を指すが、原表では一括して「外国人」とされている。
- (4) 大正八年二月二十五日「今回ノ派遣部隊ニ属スル軍人ニシテ其ノ地ニ残留ヲ希望スル者ノ除隊ニ関スル件」(防衛省防衛研究所圖書館所蔵「大正八年二月 西受大日記」陸軍省―西受大日記―T8(2―53))。
- (5) 陸達第五号は、その第二項に「前項ニ依リ召集解除又ハ現役満期ノ手続ヲ為スニハ明治三十九年二月陸達第六号ヲ適用ス」と定めている。ここでいう陸達第六号とは、台湾・樺太・清国・韓国にある部隊に属する軍人にしてその地に残留を希望する者に対して除隊手続きを定めたもので、その第一条および第二条第二項には、次のように規定されている(同右)。

第一条 台湾、樺太、清国及韓国ニ在ル部隊ニ属スル軍人ニシテ内地帰還後直ニ召集解除又ハ現役満期ト為ルヘキ者ノ中其ノ駐留地ノ軍隊官衙等ニ雇傭セラレ又ハ確実ナル事業ニ従事セン為メ該地ニ残留ヲ希望シ部隊長ノ承認シタル者ハ各其ノ

駐留地ニ於テ召集解除又ハ現役満期ノ手続ヲ為スコトヲ得但シ現役満期ノ者ニ在リテハ満期ノ日以前約一箇月以内ニ内地ニ向ケ帰還スヘキ者ニ限ル

第二条 前条ニ依リ召集解除又ハ現役満期ノ手続ヲ為スニハ左ノ各号ニ依ル

一、(中略)

二、現役満期ノ者ハ所属部隊長ニ於テ現役満期ノ前日ニ於テ除隊ノ手続ヲ為シ本人ノ本籍地、官等級、氏名及残留ノ事由ヲ詳記シ本籍地所管ノ師団長ニ通報スヘシ但シ現役満期ノ日以前ニ所属部隊内地帰還ノ行動ヲ始ムル等ノ場合ニ在リテハ所管長官ニ稟申シ所管長官ハ満期ノ日マテ其ノ所属ヲ変スルコトナク其ノ地ニ在ル適宜ノ部隊ニ編入シ然ル後本文ノ手続ヲ為スモノトス

實一の場合、大正六年一二月一日に入営しているので、部隊がハバロフスクを出発した大正九年一〇月一五日の時点で、一一月三〇日の現役満期までおよそ一カ月半を残していた。しかし、当時は現役兵の服役形態が二年在営・一年帰休が一般的であったことに加え、「陣中日誌」一月二六日の条に「廿五日夜、オフシヤレカ炊事場ニ於テ、高田兄に、余のシベリヤ残留を語ツタ。又昨夜(廿四)は、中隊に居て寝られず程考たのである。先達では准尉殿に返答したので困ツタ」と、すでにゼーヤにおいて人事係(准尉)に残留希望を告げていたともとれる記述があり、そして何よりも「舌代」の内容から判断するに在留が承認されていた可能性は高いと推測する。なおその場合、第二条第二項にある「其ノ地ニ在ル適宜ノ部隊」にはウラジオストクとその周辺地域に駐屯していた第一三師団隷下部隊が考えられる。

(6) 以下の叙述は、原暉之『シベリア出兵―革命と干渉 一九一七―一九二二』(筑摩書房、一九八九年)五〇六頁〜五五八頁による。

(7) 同右、四七〇頁〜四七八頁による。

(8) 前掲『西伯利出兵史』(復刻)(上)(旧第一巻旧第二巻)、三三三頁〜三五四頁・三七二頁〜三七五頁(旧第二巻、三一八頁〜三

二四頁・三八七頁〜四〇三頁)。

(9) 註(1)の典拠と同じ。

(10) 戦争目的の不在が、奴隸的軍紀に象徴される日本の軍隊のありかたと相俟って、兵士の自発的服従心を引き出すことができなかった点については、原前掲書、四二〇頁〜四二七頁、および筆者(郡司)『近代日本の国民動員——「隣保相扶」と地域統合——』

(刀水書房、二〇〇九年) 一九九頁〜二〇〇頁・二二三頁〜二二三頁を参照。

(11) 日本軍の自宅侵入と略奪行為については、原前掲書、四二二頁〜四二二頁を参照。

(12) 第一四師団長白水淡「上奏写」(防衛省防衛研究所図書館所蔵「大正十年二月 西受大日記」陸軍省—西受大日記—10〜2—49)

によれば、シベリア駐屯「二年有半」の間、同師団所属の者で臨時陸軍軍法会議で有罪宣告を受けた者は、賭博罪が七人、窃盗罪が六人、逃亡罪が三人、傷害致死・公文書偽造・詐欺・背任罪が各一人、「哨兵守地ヲ離ル」・軍用物毀棄・掠奪・業務上の横領・傷害・過失致死罪が各一人の合計三〇人にのぼった。「上奏写」は、犯罪中とくに注目すべきものとして、「主計カ軍用ノ麻袋ヲ露国官憲ヨリ買受ケタル際部下雇員ト共謀シ之ヲ一時雇員名義ト為シ後高価ニ之ヲ日本軍ニ納入シテ利ヲ得タル如キ、通訳カ常人ト共謀シ麻袋購入ニ関スル日本軍名義ノ文書ヲ偽造シタル如キ、遊興ノ資ヲ得シカ為他人ノ金品ヲ竊取シタル如キ、深夜民家ニ於テ下士卒及馬丁等カ賭博ヲ為シタル如キ、行軍途中露人ノ時計、指環等ヲ掠奪セル如キ、泥酔ノ余道路ニ倒レ馬丁ニ罵ラレタリトテ銃剣又ハ拳ヲ以テ之ヲ毆傷シテ死ニ致シタル如キモノ」を挙げている。ただし、これらの犯罪は、「陣中日誌」に登場するロシア人殺傷事件が、おそらくは事件が表沙汰になることを恐れた中隊幹部の工作によって示談で解決されていることをみても、氷山の一角に過ぎないといえよう。

(13) 筆者(郡司)「史料紹介 六週間現役兵の日誌」(『北海学園 人文論集』第三〇号、二〇〇六年三月) 三七頁。

(14) 前掲『西伯利出兵史』(復刻)(上)(旧第一巻旧第二巻)、四五七頁〜四五八頁(旧第二巻、七三三頁〜七三六頁)。

(14) 「ホール河谷ノ掃蕩」については、同右、四五九頁(同右、七四二頁〜七四二頁)。

(16) 同右、四六四頁〜四六五頁(同右、七六一頁〜七六五頁)。

(17) 同右、四六四頁(同右、七六二頁)。

(18) 菅原佐賀衛『西伯利出兵史要』(信山社出版、一九八九年、原刊は一九二五年、偕行社)八一頁〜八三頁。なお前掲『西伯利出兵史』も、「此情況ニ処シ師団ノ諸隊ハ一方守備地附近ニ於ケル敵ノ掃蕩ヲ実施シ他方鉄道線掩護ノ為其守備配置地点ヲ増加シ大正九年一月ニ於テハ寒ニ七十有余ノ地点二分屯スルノ已ムヲ得サルニ至レリ」(同右、四六五頁(同右、七六六頁))と記している。

(19) 憲兵司令部編『西伯利出兵憲兵史』(国書刊行会、一九七六年、原刊は年月日不詳)二八四頁。

(20) 前掲「上奏写」。

(21) 註(1)の典拠と同じ。

(22) 前掲『西伯利出兵史』(復刻)(中)(旧第三巻旧第四巻)所収の「自出兵至大正九年十月出動部隊入院患者類別表」。この表によれば、戦傷患者は第一二師団が三三八人(患者総数三三七〇人中の一〇・〇%)で最も多く、第一四師団が二九一人(二六二六人中の一・一%)でこれにつき、以下、第三師団二七〇人(二七一六中の一五・七%)、第五師団二二二人(二五一六人中の八・八%)、浦塩派遣軍司令部及其直轄部隊八七人(二八九三人中の三・〇%)、第三師団三三人(三〇一五人中の一・一%)、第七師団五人(八九九人中の〇・六%)、兵站諸部隊四人(一七二二人中の〇・二%)、第一一師団〇人(一七九人中の〇・〇%)と続くのに対し、花柳病患者は塩派遣軍司令部及其直轄部隊が二四六人(八・五%)と最も多く、第一四師団一九九人(七・六%)でこれにつき、以下、第一二師団が一九二人(五・七%)、第三師団一四七人(四・九%)、第五師団八六人(三・四%)、第一三師団六二人(三・六%)、第七師団五六人(六・二%)、第一一師団一六人(八・九%)と続く。なお前掲「上奏写」は、シベリア派遣中における第一四師団の花柳病患者の総計を三三〇人とし、月別では、大正八年五月の五二人が最も多く、新たに初年兵が派遣された大正九年五月の三三人と翌月の二九人がこれにつぐことを理由に、「派遣ノ当初ニ於テ発生シタルモノ比較的多シ」と述べている。

(23) 前掲『西伯利出兵憲兵史』三〇四頁。

(24) 軍司令部の腐敗ぶりについては、原前掲書、五五〇頁〜五五二頁。

(25) 『黒島傳治全集』第一巻(筑摩書房、一九七〇年)二五四頁。この言葉は、ロシア人の子供たちが日本兵に残飯を請うさいに発したものだ。黒島は、シベリアのロシア人について、「彼等はいずれも食うに困っていた。彼等の畑は荒され、家畜は掠奪された。彼等は安心して仕事することが出来なかった。彼等は生活に窮する外、道がなかった」と描写する一方、日本軍兵士については「彼等は、家庭の温かさと、情味とに飢え渴していた〔中略〕内地にあこがれ、家庭を恋しがった」と評している(同右、二五六頁)。

(26) 前掲『西伯利出兵史』(復刻)(上)(旧第一巻旧第二巻、四九五頁〜四九八頁(旧第二巻、八八三頁〜八九六頁)。

(27) 原前掲書、五一七頁。

(28) 前掲『西伯利出兵史』(復刻)(中)(旧第三巻旧第四巻、七〇九頁(旧第三巻、三九九頁)。

(29) 同右、七三二頁〜七三三頁(同右、四九一頁〜四九二頁)。

(30) 同右、七一〇頁〜七二二頁・七三〇頁〜七三一頁(同右、四〇三頁〜四五〇頁・四八三頁〜四八五頁)。

(31) 同右、六一四頁(同右、一七頁〜一九頁)。

(32) 同右、六三〇頁(同右、八三頁〜八五頁)。

(33) 同右、六九四頁(同右、三四三頁)。

(34) 同じく歩兵第五九聯隊第二大隊第七中隊の一小隊の事例。前掲『西伯利出兵史』(復刻)(中)(旧第三巻旧第四巻)所収の附表第四十六其二「大正九年七、八月後貝加爾州方面撤退輸送実施一覽表」(旧第三巻)。

(35) 同右、六一五頁(同右、二二頁〜二三頁)。

(36) 同右、六九九頁(同右、三五四頁)。

(37) 同右所収の附表第四十七其一「大正九年十月ハバロフスク方面撤退輸送実施一覽表」。

(38) 同右、六九九頁(同右、三五四頁〜三五五頁)。

凡 例

一、翻刻にあたっては、おおむね原史料の体裁に従ったが、読点・並列点を適宜施した。

一、判読不能の箇所については、字数がわかれば□□で示し、不明の場合は「」で示した。

一、漢字は原則として常用漢字体を用いた。

一、文字の異同や脱字の指摘など編者が施した傍注は「」に入れた。なお誤字については正字を傍注で示すか、ママと註記した。

一、欄外の書き込みについては、前後を一行空け、右肩に「」でその旨を記した。

「陣中日誌 シベリア派遣」

シベリヤ出征ニ就て(日誌及所感)

三月二十四日、汗にしみて相変らずの新兵教育。午後の演習も終つて班に帰つて来た所が、田中君が今日は動員室が将校で充滿して居ると言ふ事であつた。ん愈々今度は満洲へ行様になる、否なつたぞ。僕の喜びは一方ならず背囊を負たるまゝ、打勝様であつた。上等兵殿背囊下して上ませうと、稲見に言われて初めて気が付た。鈎かん断したまゝ、背囊は片まがり、其の内に四時頃になると高田看護手君来て、貫チヤン今度シベリヤへ行様だと。何となく今日動員室が多望(忙)であつた等、初めてシベリヤへ行事理つた。其日夜は思取りの話で持きられた。今迄除隊くと早勘定ばかりして居たが、早勘定等そちのけます床に付た。次日わ各方面より続々其の確報が得ラレタ。第一中隊ぢや夏物全部返納した。又わ七中隊で剣へハを付た等聞来る。勤務者も各々其の模様ヲ知せた。一夜、各人手別(分)にて各中隊の模様ヲ手分して見に行つた。僕わ第一中隊へ行つて見た所が、成る程、冬物全部備室に整頓してあつた。所が或人の話にて聞。各中隊伍長勤務上等兵は各一名づつ残ると言ふ話デアツタ。残念で

く其れから寝られない。特務曹長ニ話して聞いてもだめだ。中隊長殿に話シテモ返事が悪い。永沼少尉殿に聞ても返事がまだだ。二十九日にわ、最早第一番に茶毛布の返納に着手した。寄ればくシベリヤ出征の話ばかり。丁度僕ハ、二十八日に日直デアツタ。事務室に居て露領鉛^(鉛)海州ハバロフスク地方へ行事ヲ聞タ。而シ残留に成つては残念だと思つて、日直の日、特務曹長に「小橋は行けるから安心しろ」と言われた。さ其れたく特務曹長殿に「其の言葉終世忘れません」と自ら出た。毎夜く寄りたかりの話だ。

二十七八日頃には残^(殆)んど出発の見当が付タ。二十七・二十八両日第一期検閲ヲ行ふ。小雨の中にて、森中佐一名で終ツタ。講評も良好であつた。二十八日にわ、父が雨の中わざく面会に来てくれた。三十一日にわ、母か面会に来てくれた。聯隊全部新兵も古兵も外出。彼の軍□が人を連ねて居る。先ず母と共に外出して明神前のそば屋の二階に思ふ事話をした。丁度其の時、隣座敷^(トナリ)にて元太節・浪花節・活弁・こわいろノ様々あつた。寿しと蒸菓子、南蛮そばにて話した。自分の私物品わ全部母上様に持たして帰した。二階の間で相共に語るやう、決して家の事等心配するに及ばん。決して家の事共心配せずに、国家の為に盡せ、今万一貫一が死んでも決して、をつかさんわ、落胆

(八四)

せずに、「あゝよく死んだと言ふて賞めてくれるからな」。貫一「ね決して心配せずに居て下さい。自分も此の夜^(世)に二十何年間長らいたと思つたら、何の苦とする事もない、と自分は母に言ふたが、御互に泪流して言葉が胸につかいて、何に言ふ事が出来なかつた。勘定も終りて明神様へ御参りした(二荒山神社)。時間か有るので、しばらく神社前に於て話して居た。何としても「はあ帰ろう」いや母様また時間が有るよ、何度く繰返し話して居る。終に別れて帰つて来た所が、丁度四時二十分に、第二班に於て正式に中隊長より動員が発表サレタ。曰く「皆もうすく聞て居たろうが、愈々今度シベリヤ地方へ出発する事に成つた。要するに出征するのはロシヤを助けに行のたと言ふ事である。終り」の号令にて解散した。而し前に言ふた通り残留になるや心配して居るのであるから、何とも面白く無い。直井軍曹に聞ても理らん。而し第二分隊の中央にて行事が理つた。其の夜も殆んど被服の返納にて全部床ニ付イタのは二時半過て居た。余は家へ新戚知人へ手紙出すのでとても急がしかつた。床に付たのは四時であつた。毎日く動員第一日より二日三日使役やら面会人やらで来た。父母交代く五回も十日頃迄に来た。而し会つても別したる話しなけれど、親心、何とも申し様なし。七日で動員が完結して、其の後時々演習を行つた。

終に二日には正式に第一小隊ノ分隊長たる事が理つた。嬉しかつた。其の内、帰休兵を召集して、三日四日五日とも三日間にて全部召集された。去年、現在教育されたる者に今年は先達者だ。又嬉しいと思つた。第一分隊が八日には午後一時何分かの汽車にて出発した。宮庭を通過する時は、喇叭で立派だつた。

前古未増有^會ぢや

四月十三日思掛なくも、引列外出の許可せられた。五時半出門の際、前の二時半に出て行つた汽車の時間か間に合わないの、人力車にて飛ばした。其んな事せずとも充分時間は間に合つたのであつた。プラツトホームの所にて金拾円紙幣を拾ツタ。吉事ぢや家へ着た。午前中、近所知人に御無音を謝し挨拶に廻つた。午後、父上様許しのもとにて、ビール・御酒を頂き、福沢君・佐山さん等来て色々話、軍隊教育・新兵教育・精心教育・其ノ他陣中勤務やら上等兵時代に苦^(勞脱)した事を山々に話し、七時五十二分の列車にて帰つて来た。何も残らない事は無い。近所の人々、弟や妹が送つて来てくれた。宇都宮十一時無事着。家の事、思つて何とも寝れない。

十二日に先発にて仙台へ。弁当、日常設備の爲に行。十五日午後五時十五分迄にて渡西の途に向ふ。十四日、日直。

十老日には先発で仙台へ行事が理つた。大出年次と行事で有つ

た。十五日にわ大隊本部ヨリ□□其の命令を受た。十三日にわ、帰省致す。近所廻り、午後は父母の膝下ニ於て□迄思存分語つた。十五日出発。

仙台ホテルに弁当五百六十一名分依む、宿室わ陸奥ホテル。夜麦酒を飲む。計四円六拾錢。

仙台ニ於て用意万端整い、隊着。

十七日午前四時。無事弁当渡ス。途中は臨時列車故、各駅々ニ於て停車す。青森着、十八日午前五時三十五分、無事着。安方町岩手館事千葉勝之進方ニ宿ス。三日間帯在、青森市中ヲ見物ス。第二日目ハ市内散歩、第三日目ハ永沼少尉引率の許に斥候長の動作、僕斥候長に撰拔さる。

〔欄外〕

吉田丸甲板上

左の者ハ甲板上□□中尉ヨリ与ラル

輸送指揮官命令 (岡田砲兵少佐)

廿四日上陸予定 (今廿一日出発)

不審番、上下二名づつ (十一ト十二ヨリ)

日課時間

起床五時三十分(凡そ) 朝点呼、起床後十五分
朝食午前七時、夕食午後五時

食事受領 十一中隊先、

砲兵・第一・五十九、第二・六十六、第三の順、

食事受領八百名二付十名

帽子ハ一切蒙ル事能ハズ

日夕点呼 午後八時三十分

衛兵(司令・兵トモ)

上等兵一 卒三

二十壹、野砲、二十二、五十九、二十三、六十六

五十九ハ喫煙所 本日

船内場所

珍斷所 将校室ノ所(午前八時)

喫煙所三ヶ所(煙トツ、火鉢アル所)

散歩区域(衛兵ノ立ツ所ハヨシ)

船長室の上及縄張以外トス

諸勤務の交代ハ正午トス

四月廿一日 晴天、稍風アリ

今日ハ愈々出帆の日である。ニギリメシ梅干の弁当持参、十時

廿分迄事務室前に於て集合し、ハト場へ向ツテ出発ス。約三時間乗船が遅れた為、其の場ニ於て中食トナル。二時十五分、青森小学校生徒の万歳声援に送られて、母船吉田丸ノ所へ来た。船内の大なに驚いた。四時青森出帆ス。途中は汽船中にゆられて、而し余は食事ハ一度もかゝした事が無かつた。

四月廿三日午後六時、無事浦塩着。小供等が多さん居て、「ゼニ下さい」「をかね下さい」「キルメル下さい」等日本語で言ふ。すると、船から銭投げてやると「有難う」と言ふ。乞食の様な風体である。丁度見渡せば緑葉色は見た通り立派である。

四月廿三日(吉田丸船内於テ)

輸送指揮官命令

被服持領ニ付テ

一、午前八時にて上陸ス

野砲、五十九、六十六ノ順序。

馬、荷物。

朝食五時(午前)(廿三日)

昼食ハ四時半、飯盒詰ヲ受取ル、□類の整頓ハ早くする

勤務員(荷物監督衛兵)ハ貨車ノ前ニ荷物ヲ置き集合。荷物ハ

ハバロフスク迄送ルコト。

一ツノ貨車ニ卒二名ツトス。

注意(兵卒必要)

一、兵卒ハ午前八時以前、特ニ必要ナル者ノ外、甲^(板)ハン上ニ出可らず

二、阜頭^マニ於テハ濯^(洗濯)拭禁ズ

三、其の他運輜部出張員ノ陸上ニ関し指導ヲ確實ナラルシムベシ

三、上陸の開始、タトヒ指定ノ時刻ニ到ルモ、運輜部出張員の指揮ナケレバ開始セサルコト

五、埠頭ノ露人ハ舟内に入ルベカラズ

六、市街ニ於テハ、兵卒ヲ单独ニテ行動セシメザルコト

七、武装セル兵卒ハ、車道ノ右側ヲ通行スルコト(人道ハ不可)

八、单独外出ヲ禁止ス

九、上陸後、予行演習ヲ為ス可ラザルコト

◎勤務者ハ左腕ニ白布ヲ巻クコト

遺留品アル時ハ上官に言フコト

紙幣ハ交換セザルコト。

日一日と変ル様ナリ。日本の札ニ払フト請取ヲ□レル。

明日ハ二番川に宿ス。

防寒用として渡^マす者

復面・手筒・襦袢・跨下・靴下各一、毛布二枚、毛布外套(寝マキ用)

聯隊長石丸中佐は浦塩市中に於て射撃やる

衛生ニ付て

浦塩ヨリハバロフスクニ至ル間ハ「ハツシンチブス」「セキリ」

「ノーセキズイチブス」等ノ患者アリ、注意アリ。

汽車輸送ニ関スル注意

将校ハ三等客車、下士以下ハ貨車トス。用便ハ停車中ニ為ベ

シ。貨車乗組員ハ三十六名

二番川宿営に關スル注意

(一) 出発ハ清掃スルコト(二) 其予防

(三) 備付物品の監守位置ヲ動セサルコト

(四) 水ハ買ニ付切約スルコト

五、各休所、酒樽アルニ付注意

朝食ハ午前八時、中食正午、夕食ハ五時(二番川於て)

入浴ニ付て

盗難ヲサクル為、監守員ヲ置クコト

軍事郵便ニ関スル注意

午前、各府県、□ニ区分スルコト、葉書・書状の形ニ依ルコ

ト、所属部隊ヲ明スルコト、宛名ノ記述ヲ明ナルコト、駐屯地ヲ書ザルコト

私用軍事郵便には身体實力行動のキライアル者ハ禁ズ

必要ニ応シ点剣スルコトアルベシ

貯金替セハ送ルハ出来ルガ受ルコトハ出来ズ

書狀・葉書・写真・小包八（公用）

四月廿四日 曇天、後雨

四時半に弁当持領シ、六時朝食。九時に全ク上陸終り、埠頭北ニ於て休ム。又銃休けい持ッ内に中食終り、○時半出發す。二番川に向ふ。浦塩市中ヲ通る。市わ山地に有るを以て、上り下りニ甚だ通行に困難である。東通に行けば電車通り、屋作りも銀座も不及ざる程の家作りである。見受ル所、支那人蒙古人・ロシヤ人等居る。市一寸と外にて、日本人婦人の豆茶の接待あり。二十分ばかり休ム。出發ス。市中は薰くさい、非常に気持ち悪し。二番川に着く前、防寒用被服受領(二番川於。襦袢四十三、袴下四十三、手筒四十三、全部防寒用と着代分。

日露時代作りし堡壘、或は通路実に大なるものである。実に昔の影を残す。四時半二番川に着す。日露其後作りし兵舎広大な煉瓦作りの兵住十家あり、此所に一泊す。室内わ寒き故防寒

の準備充分なり。一室に巾三尺高さ一丈位な暖炉三つあり、夜（類）わ誤楽場ニ於て（当兵舎の下）青年会。軍隊慰問部に於て、畜音機にて「紀伊の国」「カッポレ」ヲ聞ク。活動ハ小笠原騒動。浪花節、神崎与五郎東下り（雲衛門式）。実に郷里の事思ふて、シベリヤの地に在るを知らず。十時半宿舎に帰り寝ル。夜は非常に寒し。

四月廿五日 晴天 初めて露人ト話ス。

八時半より二番川兵舎前に於て体操（慣行）行ヒ、十時半整列シテパン一食渡る。

三時二番川ヲ発ス。シベリヤ鉄道ヲ北へ向ツテ出発ス。十時十五分ニコリスクに着ス。約二時間休憩ス。此の地は過げき派約一千名居る由。車中は武装の儘行進ス。

廿六日 途中降雨アリ。稍寒し。朝食十時四十分。

昼食ハイマン市ニ於て。四時半着。第十二師団ノ者ニ戰爭話を聞く。約貳時間休暇ス。

廿七日 曇天。四時半着ス。約三時間休暇、朝食ス。ビ
ギンに於て。

ウイズルスカヤニ於て夕食を受クル。約四時間休憩す。

廿七日 曇天。十二時無事ハバロフスク市に着した。廿八日午前十時無事兵営に着した。此の兵営は二番川と残^(遺)んと同じである。日本兵はかり尉^マ間袋受領(九州大坂地方より)。最初五十二ヶ受領ス。

じゃ□と、米国兵も住んで居た。

廿九日には、夜慰問袋が二ヶ渡つた。一つは天理教会より、一つは大坂より来た。

封筒・婦人絵葉書・ゼム・ボイス等渡つた。

何しろ此の地は衛生が行届て居らず、土地の不潔には驚いた。夏の事を思われる。其の次は水だ。まるで□茶の様でチブすが非常に多い様である。

四月卅日 曇天 午後吹雪

午前中二演習あり。□□防寒用外套を納めた。三時より市内巡察に行つた。兵器庫、船着場へ行た。雪が降つて、横顔吹切る様ないたさであつた。夜は一時より又巡察に行つた。実砲を込て行つたのである。寒くてく指の先がちぎれる様である。四

時、無事帰る。市中は極めて平温^(穏)なり。

五月一日 上番日直

日直大尉注意事項

一、煙草ヲ、毛布・あんべらの所にテ喫セザルコト

二、舍内に於て薪ヲ割らざること

三、明日は旅団長閱兵に舍内巡視ノ件

四、清水俊雄聯隊本部出スコト

中隊長命令

点呼のコト其の儘に置くコト

戸叶堅三・仙波文次郎・高橋金蔵・篠崎右三郎・茂木攀・渡辺

岩次郎・山本文一・横田長三・鈴木信次・青柳竹次郎・高橋武

次、終り

五月二日 今日はいまれに見る好天気である

五月七日 晴天

昨夜の命令にて達せし通り愈々相年式は、九時聯隊本部南ニ於て行なう。丁度時間を打つや、東部の方に面し君ヶ代を一回吹奏シ、式終り。十一時より医務室前空地ニ於て各人ニ渡り酒各

人一合づゝ渡り、水筒へ入れて湯呑携行にて祝盃を上ぐ。聯隊長所感の内君臣は義、父子は愛なりと言われた。中隊長講話、之より北約三十九里の所にウイルノール五中隊大塚大尉守備にかゝる地方の其の近防^(密)ニ、約五千の過激派は、我師団到着時以下良き為退散し居。而し何時たりとも集合し暴行するから用心せよと申された。下給品懷中シル粉二十匁、酒肴料十七錢ツ、渡る。

五月八日 晴、稍風 坪田准尉殿と、午後四時と午前二時と巡察に行。船着場、兵器倉庫、其の夜兵器支廠に敵襲が有つた由。

五月十日 晴、稍風 中隊長学科、於中食堂
露人ノ性質ニ就て

金ヲ以テ働ク人間なり。交通上伝令等ノ際、或は独立勤務ニ服スル時は金品物(煙草或ハ砂糖・酒)をくれて、伝令の時糧食等くれて我便利トす。恩を思わないから、一度に多く与へず、少なく毎数多く与ヘルコト。宿営上或ハ通過上与ルは空シ。金錢より飲食物の方宜シ。巡查等ニ金を与へて言ふ。虚言を言ふ事甚シ。されば一言もへりくつ等言われざる様、細心注意すべし。問題が起きたら、早刻上ニ報告スルコト。若シ事件が出来

(九〇)

たら、早く報告する事にする。外人は武装をきらう故戯場等に入るを禁ズ。

英国軍司令官の事件ニ就て

女子供には敬意を表せ。日本人は恐しいと誤解させざる様。水汲女、行通の際ニ除けて行。郷に入つては郷に随へ。土地に習慣を尊重す、而已。

チタ方面の事件鉄道守備ニ就て

正当防衛の軍服ノ尊嚴、早速に報告する。

中流以上は日本人を歓迎す。

アメリカ人に対しては反対なり。

露人の家に行時は、戸をたゞく或ハ窓からのぞく事は禁す。家に入ル時は着剣は成るべくさける。着剣セザル時は必ス装填スルコト。而し戦争の時は此の限り非ず。自分の權利を尊重する習慣あり。田畑より或家畜等をくれても、相当の金額を以て買入ルノ承知を得てもつて来る様にする。

家宅相^(搜索)さく^(素)の時等、総て物を持つて来ざる様に注意する事。

十三師団の時計事件

砲兵工廠、ヲカテリンスカヤ停車場の向の村は特ニ注意する事。地方食物を食わざる事。生水を飲まざる事。生卵にはヂストマ^(肝臓)(ニツク)住んで居る。生物(牛乳)等は特ニ注意する事。

洗面の時にも口中の水は沸湯ヲ用ルコト。

日曜五十二日。祝祭日は四十何日ある。日曜と土曜日の半日にわ販売せん。ゼイタクヒン等は非常に高い。其の他はさ程掛値セズ故、あまりまかさざる様買物の時考べし。夏に於ても夜間は非常に寒くなる。露人は品物を盗む平気なる習慣あり。健康上室内に在ル時は運動ヲ行フコト。日本人の性質として郷里を思ふ念を持たせずして、特ニ分隊長は特ニ注意スルコト。行軍等の時わ水汲の工夫をする事。荷馬車等備入レタル時は、隊と隊との中内に入れて行事。

過激派に就て

伏兵を使フコト非常に多し、側方を特ニ注意スルヲ要ス。欧州戦場の実験ヲ得た物非常に多い。固人^{マツ}の部戦争ニ上達す。

特種^{マツ}の技能(斥候射撃)ニ上達スルモノアリ。

戦闘は心^{マツ}す隠隊ヲ作り側方よりまわす。

全て林は密林にて通視は困難なり。凹地は湿地とす。かやが多い故根を渡つて行進するか、巡察斥候の時にはカヤを持つてみのを作つて行事。特に予備の弾薬の盗まれに注意する。兵器弾薬に注意する事。隊とくとの連絡を断たざる事。大小行李ニ付テ行時等注意スルコト。家屋ヲ利用して戦争スルコト。非常なる抵抗を有す。間諜ヲ良ク利用する故、支那人・朝鮮人に注

意せよ。針金^{マツ}こうとう、或は通常^{マツ}こうとうが多い。昼夜共断全単独は禁す。

特ニ健康を保持する事。特ニ三等症に對しては注意すべし。

伝染病は一等賞^{マツ}ニ加入ス。今は戦時同様に注意する事。沈着周章、小勇ニ注意スルコト。

家屋防禦ニ就て

敵ノ砲ヲ有せざる時、

総て見通しの悪き所は不睡とす

1、射撃の設備 2、守兵の援 3、側防 4、内部の

設備 5、火災予防

〔欄外〕

十日に初めて機関銃の命令を受た。

五月十一日 晴、稍風。日直一時交代。

今朝、起床同時出勤命令が在つた。直ちに武装支度に取掛ると、大根田伍長殿と日直交代ト言フコトヲ曹長殿ヨリ聞テ、早速交代ス。残念デアルガ機関銃專習員を昨夜の命令に其故行ぬのである。実に遺憾千万デアル。

出場者左の如し

出 場 者	一	一	一	一	一	三	二	三	四	三	二	三
大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉	大 尉
中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉	中 尉
少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉	少 尉
准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉	准 尉
特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹	特 曹
軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍	軍 伍
上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵
一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵
二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵
ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ
看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護	看 護
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者	事 故 者
上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵	上 等 兵
一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵	一 等 兵
二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵	二 等 兵
ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ	ラ ッ パ
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計	合 計
145	145	145	145	145	145	145	145	145	145	145	145	145

事故者姓名

中隊外の者計七名（聯本部・師団司令部に在者）

芝塚真次 山田光司 熊倉半 外塚源一郎

菊地忠吾 長山喜代松 小林源吉

上等兵の部 計四名

小橋貫一 福田末一 大関義藏 石川光司

喇叭手 計壹名

塩田彦一郎

炊事当番 計四名

熊倉源吉 小口峰 平塚善四郎（第一大隊炊事）野村栄太郎

入院患者計四 入室壹名

斎藤竹三郎 菊島武三郎 赤羽慎一郎 相馬良一（入室） 大

島秀文

練兵休患者 計六名

田上嘉重 斎藤勇 五味田堅一 橋本彦次郎 伊沢義家 大

塚鶴松

就日直患者 計四名

高橋忠次 篠崎広吉 加藤勝一 手塚末吉

聯隊当番 計壹名

佐橋喜一郎

以上右三十二名

以上出る理で在った。丁度十一時頃出勤取止トナツテ、一同班内ニ於テ休養シタ。午後ハ機関銃ノ演習ヘ出タ。

五月十二日

第一回銃の名称及定位ニ就テ学科。四時頃終了セリ。今夜は下痢が初マツタ。何デモ炊事ノヒジキが悪カツタ様ダ。二時頃ハ耐ラレ無クテ便所ヘト走ツタ。ヤ苦シカツタツテ、御話ノ外ダ。最愛ノ猿又一着ママ義性トシタ。帰テ床ニ就タガ何トナク苦シイ。寝番ハモ我慢ト思ツテ寝タ。

五月十三日 曇、降雨

今日ハ八時の整列ニテ酒保ヘ集合ノ様に佐藤軍曹殿より達セラレタ。十時頃迄名称ノ復唱、定位ノ変換ノ学科シテ居タ所、又我が出勤令令ニ付、第三大隊ハ全部中隊ヘ帰ル様にト駆足ニテ

集合、武装ヲ整ヘウエルノ一ヘ行ヤウニ聞タカラ喜デ居タラ^所、古哥克の仲間喧嘩が未だ解決が着カナイノデ出動スル。中食も終了し、一時に屯営出発ス。服装ハ軍装ニシテ背囊除ク。但シ外套、防寒襦袢着用。干麴麴一携行約二千米位、停車場南地に集合し、其の内命令無く、空家ニ行ツテ休憩ス。約一時間ニシテ帰營、中隊ニテ警備其ノ儘ニテ、靴ノマ、床ニツク。石川中尉殿ヨリ注意サレタ件、何だか自分ノ身に当嵌て実ニ体ノ平常の建康^マが大だと感シタ。まダ午にも下痢ハ良イが腹ガイタム。

五月十四日 晴天

八時、機関銃演習ニ出場ス。午前中ハ半輪右左、照準銃底開閉ニ就テ後ハ無く、体も良好ニナルでせう。明日ハ師団觀兵式ヲ行フ筈。服装ハ軍装入、夜山ヲ降ス。終リ。

五月十五日 晴天

八時半整列。聯隊本部前ニ於テ軍旗ヲ向ヘ、大通の東側ニ集合シ旅団長閣下に敬礼し、間も無く師団長閣下に敬礼して大通へ出て、東北へ向ツテ行進。女学校前には老沼^(生)參謀長、後の師団長閣下の前にて分列行進ヲ行ツタ。見るもの格^(格)の如く盛況ヲ極メタ。中食頃帰ル。午後は石川中尉殿ノ用事デ外出シタ。各々

商店ニ行ツタ。掛値ヲスル事ニ驚イタ。支那人最モ甚シ。露人は差程デモナカツタ。帰りハ教会堂ノ所ヨリ四人デ十錢ブル、くノ客馬車デ帰ツタ。賃金拾錢、安いものだ。六時帰營ス。

五月十六日 晴天

午前午後共、機関銃演習出場。特記ナシ。八年度專習員ヲ命ゼラレタ。

五月十七日 晴天

午前午後トモ機関銃演習。出場特記ナシ。

五月十八日 晴天

九時頃迄、手紙書をシテ居タ所が、永沼少尉殿が狩に行からと言フノデ御共シタ。□□東南方の土手が有る方へ行ツタ。鴨のやつめが居て追囲シタ所が残念であつたが、一羽も得ズ帰ツタ。丁度、生果・甘味・葉書(喜信堂)・酒・煙草の御下賜品が有ツタ。別記なし

五月十九日 雲天

相変らず機関銃演習へ出場。分解手入法。午後は一寸と駆足等

アリ。骨折にて終る。

五月廿日 晴天

機関銃へ出タ。分解手入法及各種搬送法ヲ行フ。

五月廿一日 晴天、稍風アリ 水

午前中酒保ニ於テ、銃の機能ニ付て学科あり。午後は倨銃及駆足行進ヲ行フ。三時半修了セリ。

五月廿二日 晴天 木

昨夜、酒保ニ於て浪花節を聞タ。伊東巳代治氏の立身頓才談、語学に精通して居るを聞て、自分もつらく生来の事を考た。煙草を断然よして語学を研究する必要とする。彼も人なり、我も人なり、如何かして僕も社会的人物になりたいが、貫一否一貫は此ノ辺に存するのである。而し親の喜も考なきやならん。床ニ就て、実に考た。此の頃の期節は、シベリヤで朝夜殊に外被一枚ぢや寒い為、又入浴が出来るのぢや僕も安全だ。今日は機関銃の弾薬補充及銃座の作り方ヲ行つた。其れから第一大隊西の凹地を占領する所仲気合かつて居た。最早終る。

(九四)

五月廿五日 晴天 午前中細雨

上番甲内衛兵

一番兵 二番兵 三番兵

軍旗 斎藤丑蔵 潮田豊吉 田上嘉重

一番歩哨 加藤勝市 熊倉源吉 山本甚一郎

一番歩哨 赤間吾市 軽部春吉 伊沢義家

司令 小橋貫一 歩哨掛 岡秀雄

五月廿八日 上番日直

五月廿九日 過番 雨天

午前中は降雨の為、舍内ニ於て体操セリ。正午、新開上等兵ニ申送ル。午前中□特筆者。通信・夜撃砲・機関銃等帰つて来タ。昨夜、ホールニ於て、鉄道約六百米破解セラレ、夜襲にて、兵卒一名戦死、卒九名負傷等の由。出勤する為特案者は帰る。中食終り午後一時半ヨリ体操・敬礼、約一時間。三時ヨリ衛生講話。四時四十分頃より、各室長集めて(余行)愈々明日聯隊長の率に一・二・四中隊、及九・十・十一・十二中隊率いて討伐^伐ニ行事と成つた。準備に多忙なり。早速家へ手紙出す。夜、命令にて六時出発の事となる。三時の起床、六時屯営出発、九時

に汽車乗つてホールに向ふ予定。弾薬二百四十発携帯、口糧四日分携行の事。

五月三十日 曇天

松尾支隊七ヶ中隊(四・七・八・騎十八聯二中隊・特別ウスリー隊二小隊)□百八十頭、ビジバヤ(東南十二里余にアリ)、ホル東北方六七里、ソニヤジコンスキーニ向フ。

暴行禁ス。野砲一聯隊ケ小隊。工兵一ヶ中隊とす。

十一時、哈府出発。汽車輸送にて無事ウエルノ停車場へ着ス。

砲ノ二門アル甲装列車等カ在ツタ。昨夜敵襲にて発砲したとの事デアル。其の夜はキヤ河畔の製板工場へ行つて宿営する事になつた。夕方三食分飯盒炊きし、板の間へアンペラしいて寝に付た。丁度十二時頃寒いのに目ざめて起出し、事務室ニテタキ火してあたり、乾草の中に寝ころんで四時に起床した。

五月三十一日 雨曇、午後晴天

四時頃起床して、外の隊は出発した。降雨最中であつた。我中隊は、七時キヤ河畔ノ製板工場舎營地を出発。河を渡し船に横断して、ビジバヤ方面ニ向ヒ出発した。我大隊中10・11渡河の節、第十中隊で直接後援してくれた。我中隊は左本隊となり、

支隊長通信・コザツク騎兵・歩兵(十・十二)・機関銃隊・第九中隊、砲兵・工兵等の順序にて前進す。間も無く、コザツ兵^{ツ脱}が、通り掛リノ露兵を馬デ走ツテ行つて捕て出問したが、何の事無かつた。其の追行様、実に装観なりき。間も無く、十時頃になると敵はいよく近し。我騎兵にて過激派三名を捕て、後手にして来た。さ背囊は重くてくたまらない。何とも誰のかほ見ても色は無い。愈々エゴロフカに於て中食。終ルヤ石川小隊特別命を受けてコザツク歩兵二十名を連て出発した。徒歩ニテハブレンコウに向て、家宅掃さくした。可愛さうのがあつた。ぶるく振つたから、あゝ人間人間まして何等の変りも無い。同情生ず。其の内コザツク兵中に英語が出来得る者と親しく会話して、何とも意志の通が出来鼻高かつた。父母の恩だ。過激派二名、獵銃一、実砲五十発持つて来た。今夜、同地帯在。炊さん大分勞した。

六月一日 晴天

出発午前三時。エゴロフカヲ出で、我中隊は左側衛とナツテ出発シタ。何しろ昨日のつかれで行軍面白クナイ。只肩が痛む叶リデアツタ。途中は左ヲ見テモ右ヲ見るも見通のつかぬ密林デアル。人家一家も見ず。山中に於て朝食。直出発した。我小

隊の一・四分隊は先兵になり我分隊及第三分隊は本体となつて行進中、間も無く余は建傷炎(建傷)を引起し、九時過ル頃、マルシノと言ふ河畔の村落へ着タ。其の村落にて約三時間位休憩して、昼食を終り兵のつかれに、中隊長殿も同情なされて、馬車を雇ひて背囊を全部積載して行軍初めた。何とも建傷炎で困ツタ。

マルシナニ於テコザツク兵ヲ依ンデ、布告文及村民ヲ集メ或ハ呼んで意味及説明して聞セタ。午後五時頃、ジューコフカに到着して、宿営する事になつた。永沼小隊は、小哨になり、橋に横木或ハ丸太ヲ渡して、機関銃ハ銃座を作りて、前方用心して居る。敵の情況は、今夜、過派百五十名を暮集(暮集)して夜襲するとの事で在ツタ。其の町より獵銃約三十挺捕かくした。我分隊は、橋の側へ一ヶ分隊のみ宿し、其の家の半分は虫が居て、寝る事出来ずと手づくろいしたが、何のくそ終二宿してしまつた。丁度二時より三時の間に、我歩哨が敵と木の切幹を見て射撃して、約六七発松葉と云ふ兵卒の右の服をかすつた。一同銃声に驚いて、小哨迄が出勤したが何の事無く終ル。冷水が在つた。

六月二日 晴天、細雨あり

今日も出発は三時であつた。山の中を行軍だ。右を見ても左を見ても大木ばかり。七、八年前の山火事の蹟かな大丸太はくさ

(九六)

りて横たをれになり、十分の七は大木にて、枯死して黒くやけて居る。道悪き道をふみ別て、十時頃、タバンと言ふ部落へ着タ。此の部落は朝鮮部落で、朝鮮人ばかりである。毛髪、目色、顔色と言□毎に女等も風俗は違ふが、しばらく茶目人を見て居た我々には、なつかしく思われた。而しタバン迄来る時は、足がいたくてくくやつと来た。水呑んでは、保健錠を呑んで行軍。汗かいたので、休憩時中は体が冷えて、便所二行つたら、体が冷て真青になつた。午後一時頃、タバン出発。愈々過激派本部ビジバヤに向つて戦備行軍。先兵十二中隊歩・騎・砲・工・電信隊等にて、初めての戦時従隊(隊)にて向ツタ。仲立派なもんだ。右見て左見ても大木焼蹟叶り。小木がこんで居て、通行は非常に困難である。道路は山中の事にて非常に悪く、途中に於て休みく一寸と進んでは止り、終に道悪く工兵架橋の為三時間の休憩した。戦備行軍は通常検閲等行フより楽である。終に砲兵及騎兵の一部は帰り、我永沼小隊は砲兵援護の為、タバンに帰られた。我等は五時頃無事、ビジバヤに着シタ。途中は相変らず密林で、ホーホ鳥が鳴叶り。其の途中、林中に於て過激派の遺留品、鮭の干物、牛肉の塩つけ、生牛二十頭、南京米十五六袋等戦領した。其の夜、ビジバヤに於て内衛兵。南京米は何とも食へぬ。

六月三日 雲り、雨降り

今日は滞在。何とも足がなほらない。兵卒は豚を殺す者や、鶏を料理する者や、仲御地増である。自分も鶏一羽を殺して、鍋にした。夜、キヤメル及銃床パンが渡つた。明日も出発無し。

六月四日 晴天

午前中、露人及注意事項が中隊長及曹長殿より在つた。露貨にて千二百留紛失したとの事届の為、非常呼集が在つた。午後一時ビジバヤ出発す。タバンに着す。帰り道は早い様に思われた。前日徒渉した川も、今は通行更に易となり。今夜は第一小隊は小哨になつて、前方用心の予足である。散兵壕及其他の施設シタ。十時よりブルドキー方向へ斥候に出て、露人に対し過激派との連絡の如何を正し帰ツタ。

六月五日 晴天

小哨も正午に交代す。午後三時より内衛兵に当る。四時半頃着所。小供が葱を間食とするにや驚いた。此の村の村長様を小哨に護送スル時の有様、実に満足デアツタ。

〔欄外〕

兎角労すると家の事思われる。報告□はがいしてかなり。

六月六日 降雨

十時頃、衛兵申送。宿舎二帰る。舟の様なものが白だ。皆で気合掛けてちにした。朝鮮人は葱をなまで食ふ。老婆を大切にす。非常に感じた。

六月七日 曇、降雨

昨夜十二時に命令あり。ジェコフカに向つて出発。実にくたびれた。帰りに山中に於て、射撃行ふ。機関銃も行ふ。蜂蜜を買ツタ。二十銭、安い。

六月八日 晴

今日のは出発日である。昨夜下給品の酒が渡り、実に面白かつた。新兵、三時頃より打起して、もちを作らせた。

十二時、愈々、朝鮮人村タバンを出発して、ポルトノイに向つて出発。途中山中ニ於テ、過激派を銃殺した。三時頃ポルトノイニ着。今夜は小哨余わ六時半迄、下士哨に出た。七時引上ぐ。夜ハ一時間半位シカ宿ずして、小哨ニ立ツタ。第十中隊が密林

中にて方向を失ヒ、一時(夜)歸つて來タ。

〔欄外〕

総テ行軍等スルト、^(應)微面に体の大切、特ニ足の大切が感スル也。

腓傷炎にや実^(應)に困ツタ。

行軍中わ冷麦や内地の食物がほしくなつた。

六月九日 晴天

今日ハポルトノイを出発して、マルシナに向つて出発した。途中ジューコフカ町にて、約一時間半休憩して居た。其の内に命令が在ツテ、ソプロフカに向つて出発した。途中マルシナニ於テ、十五分間休憩した。マルシナカラハ山中行軍にて、実一同ハ勞シタ。午後八時頃愈々ソゴロフカに着して、其の地に宿營した。次日ハ八時の出発の向、中隊長殿ヨリ色々訓辭アリ。各分隊毎にて宿營した。

〔欄外〕

支那人ノ女はきれである。我日本人に同く黒髪と黒目がよいな。

(九八)

六月十日 晴天

昨日のくたびれて、今日ハ出発出来るカト思ツタ。一同モ皆ヒロウシテ居た。五時の起床にて、中隊ヨリ渡ツタ鳥肉を鎌倉時代に使用した様なツボデアル、日本のかまどと同様な中にはパン焼カマドが在る。其の中で、昨夜飯盒デめし^(應)たいした。今日ハ一同ツカレの中にも、五時の起床。銃掃除する者、飯たくもの、室内片付る者、区分して七時頃にわジャガエモト肉とのエキスの汁。美味デアツタ。又ジャガ芋のエキス煮も作ツタ。八時に集合するや、中隊長殿ハ、土民一同に訓辭シテ、村長ヨリ左の答辭アリ。

我々ハ決シテ過激派の様な悪い事しないで、農業に従事して体を大切にすると云ふ事でアツタ。

愈々出発は九時半頃。其れより、先、キヤ川右側通りて、前進して行理で在ツタが、道無く、キヤ川を四人乗の舟にて、一時間半もかゝて、中隊全部渡り終り、エゴロカカを通過して、途中暑くて、又井戸の中に今の暑さに氷が在つて実によい水た。水を□□〓〓。八時頃ウエルのうに着した。既ニ永沼^マ少隊先着。飯盒炊さん及味噌汁のはすの味。其の味噌汁が又美味で在つた。其夜キヤラメル一ケ、煙草三十本、酒一合アテ渡り、其の夜ハ車中にて泊る。

〔欄外〕

朝鮮人デ須三郎によく似テ居ルノが居た。

今回の討伐⁽⁸⁾ニテ、支那人の老者を大切にすること、タバ^ンデ野菜食ツタ事ハ喜バシカッタ。

六月十一日

朝三時ニ炊事当番。起シテ、味噌汁干ピヨウをたいた。七時ウエルノウ¹出発す。

十一時半、哈府着。コザツク兵軍楽隊に向られ、山田旅団長閣下出向られ、二時屯営着ス。実に軍楽隊に向ラレタノハ喜バシカッタ。家へ凱旋シタ様な氣持ガシタ。其の夜、足長くして寝タ。明日ハクラスナヤレーチカ行との事デアツタ。

〔欄外〕

出発命令が在ツテ、洗濯物ニハ困ツタコト。

〔欄外〕

行軍中壮建デアツタ事ハ、父母の為カ、天祐カ、神助カ、何より喜バシ。

六月十二日 晴天

クラスナヤレーチカ行は、準備ニ多忙ナリ。九時頃、取止の事聯隊長殿ヨリ通知アリ。中隊長怒ツテ、今度ハ中隊全部行様になつた。一時出発本部前ニ於テ軍旗を拝し、聯隊長殿ヨリ訓辞アリ。出発した。途中暑さに困ツタ。夕方無事着ス。其の夜、クラスナヤレーチカ兵營ニ宿す。石川上等兵とビールノム。梅キ片様より頂く

六月十三日 晴天

話がアメリカ人に通ずるにわ、僕ハ満足シタ。朝食終り、直ちに中隊長殿ヨリ訓辞アリ。体操約三十分。敬礼十分。中食終り。夕方交代の理デ在ツタガ、取止トナリ、夜ハ此ノ地の酒保ニ於テバイオリン、マンドリン、大バイオリンの合奏ヲ聞キ帰リテ、曹長殿ヨリ御目玉頂戴ス。東京時代の事思出サレタ。



六月十四日 晴天

六月十五日 曇天、夜降雨

— 143 —

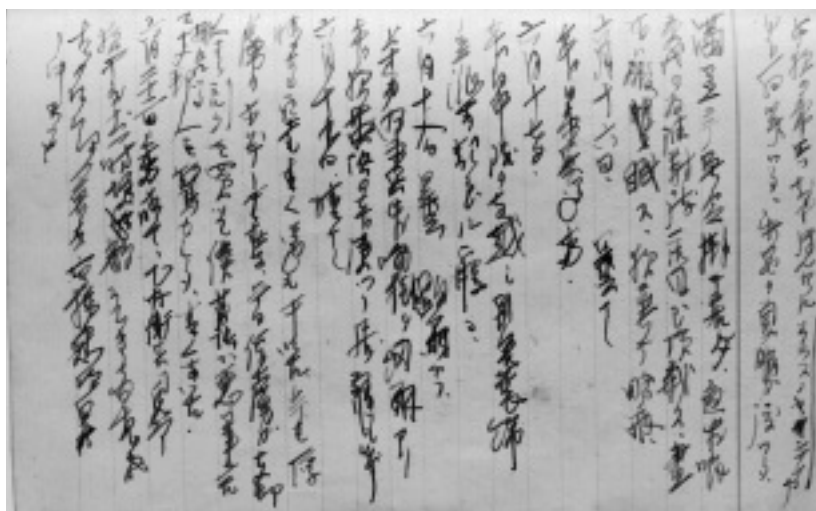


写真3 「陣中日誌 シベリア派遣」

至ツテ降雨。

〔欄外〕

今夜の衛兵ぢやほんとにクラスノヤニナヤダト一同笑ツタ。新品ノ夏服ガ渡ツタ。

六月十六日 曇天

本日衛兵過番。

六月十七日

本日中隊の家越し、別舎裝飾ノ立派な部屋に寝る。

六月十八日 曇、細雨アリ

上番内衛兵歩哨掛り。細雨アリ。本夜英語の本読つゝ居寝りも出ず。

六月十九日 晴天

晴たる空も青く、道も干いた。今は俘虜のホリデーで在る。今日俘虜が支那人よりミルクを買つて、僕英語で悪い事言て、掛合ツタ、支那人を驚カシタ。青くなつた。

六月二十二日 上番 晴天 乙内衛兵司令

夜丁度十二時頃、「□」、高橋忠次□□ノ件ナリヤ

六月二十五日 晴天

廿五日予定の来着スル所、雨天の為、二十六日来隊。副官通訳者等も五六名附添テ来る。先ず中隊は全部整列シテ向タ。営内巡視等終リテ、大隊長殿ハ残ラレタ。我々わ血色が非常に良しと言われたと一同か大笑。

六月二十六日 晴天

大隊長殿帰らる。朝食後ニ整列シテ、大隊長殿ヨリ御訓辞アリ。

六月二十九日 晴天

坪田准尉殿日直にて、朝より諸般の御注意アリ。衛兵所の前に整列シテ、喇叭吹奏シタ時に、俘虜君堵の如く。海行カハヲ吹奏シタ時ハ、ヤポンスキーモ満足ノ体であつた。中食終リテ帰る。

〔欄外〕

六月二十八日 上番の時十日頃帰ルトナツタ時は□チャ、マ

ンザラ悪い気持でもなかつた。

六月二十八日 晴天

中隊長殿ヨリ御注意訓辞アリ。余日直、第一衛兵上番。

六月三十日 晴天

石川上等兵、衛兵服務中^マ到れて、内田と交代ス。次日入院。余過番、本日昼頃病重シトノ報アリ。中隊長□止タ。病院、ツメキリ、形勢不□□。

七月一日 晴天

愈々七月である。石川上等兵終ニ死去ス。時に午前十時なりき。我々上等兵中一名死去、遺憾^マナリキ。午後十時、永沼少尉殿ニ御供シテ哈府へ行タ。スンガリー汽船へ乗リテ向ツタ。同日一泊の予定デアツタガ、四時帰ル。帰ノ際、船中ニ於テ、学□と少尉殿と語つた。我啞然トシテ□、彼ハ伍長になつた。

〔欄外〕

魔行と言が、本当に僕ハバカヲ見タ。中隊長殿が石川伍長が病氣〔以下二行判読不能〕

七月三日 晴天

中隊東側ニ防禦線ヲ作り、余日直。坂本ヲ苦役ニ従事セシム。

七月式日

中隊にては、昨夜、石川上等兵の為に、増渕軍曹と外二名、御通夜シタ。其の夜御霊が飛ンダのは本物らしい。歩哨が驚イたと。次日、中隊生列^憲シテ、彼の葬式。余日直。写真を取ツタ。其の内、二時出棺。アメリカ兵營の裏ニ於て火葬ニシタ。伍長ニ任官ニナル

七月十日 晴天

哈府連絡の爲市田と同行。俘虜一名同行の爲、旅団司令部に行。

哈府、夜の美観。

〔欄外〕

俘虜は二年も手紙も来ないと言うが、実にあわれなり。

〔欄外〕

埠頭衛兵ニ於テ、七月二十日武装を脱して居たので中隊長殿

ヨリ御目玉。

七月十一日 晴天

スンガリー定期船帰る事出来ズ、ボートに乗りテ帰ル、四時。

七月十二日 晴天

帰軍、手紙開ス。第二内番兵。

七月十三日

正午より日直。午前中、哈府より将校見学ニ来隊スル理にて掃除整頓ニ多忙ナリ、午後命令ありて討伐ニ行。余行かず。四十二名(曹長以下)出勤せり海老原君より、故森川正一の話ヲ聞た(第一師団一)

マ
六月十五日 晴天

本日聯隊長殿、哈府ヨリ来ル。実に老練なる訓辞アリ。身ヲ大切に^性する事。水ヲ吞まぬ事。腹ヲ冷さぬ事。腐根生ヲ出さぬ事。他人の物一つとして取らぬ事。我中隊に於テ既に其一例アリキ。暴発ニ注意セヨ。貴重なる一名に差支るそよ。寸志として金子ヲ頂く。午後第一衛兵服務。午後四時交代ス。

〔欄外〕

黒龍江の鯉の大きいのにや驚いた

〔欄外〕

暑さわ暑し。ハイ・アップ・ブユの居にわ平困^閉シタ。蚊もまけずに居る。二十二日の夜外で頭カツタラ一寸トコブセツ出タ

七月十六日 晴天

本日衛兵所へ順三郎の手紙が来た、中々上手になつた、又父より新聞の七月一日二三日ノが来た。俘虜の運動会を見た。五百ヤード競走等有つた。オリンピッククの如し。

七月十七日 上番 埠頭衛兵 晴天

七月九日、埠頭潜伏斥候。

本日午前七時着。コザツク出征ス。カルメコフ指揮の許に大筏討行ふ由。六時帰ル。

七月十八日 曇天

直井軍曹殿司令にて、余歩哨掛として行。沼尾真広歩哨掛。海外発展及自己ノ希望ニ就テ大イニ論ず。一時過に至りて歌会が初まつた。

水飲みて動員下す暑哉

高橋武次

クラスノにヤレやれと 思ふ衛兵の

チカくめぐる俘虜の□□□ 鈴木信次

ヤレくと言ふ其の人は米の飯

二度と暮すな己がち□ぞ (某)

右はクラスナヤレーチカの題である

〔欄外〕

十七才が下で五十三才の男迄出征シタツテ仲々元氣であつた。

七月二十一日 上番 晴天 夜吹雨アリ

第一内衛兵、歩哨掛ニテ行

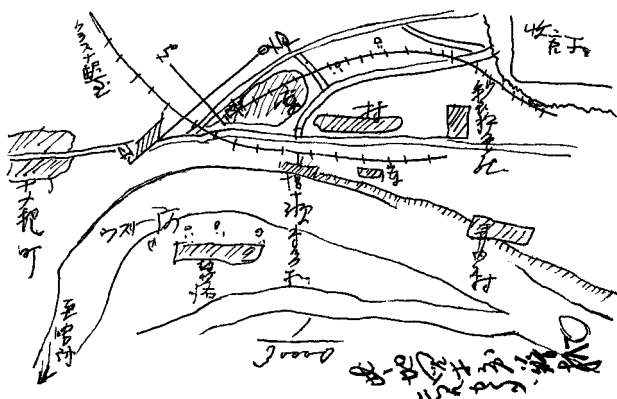
七月二十二日 晴天 細雨アリ

鈴木信次が第一歩哨ニ於テ居寝りをした件ニヨリ、中隊ノ問題ニナツタ

七月二十三日 晴天 涼風

昨今は朝暮共涼しく実に秋の気分になつた。内地の十五夜時分の様^風気にも取れる。野分が吹く様である。

七月廿六日 潜伏斥候 晴天
 来ル八月八日軍旗祭ニ附キ、余興トシテ、元太節ヲドリ、盆ヲ
 ドリヲ行フトヤラ。直井軍曹殿、先方ニナリテ、米兵舎方向ニ



テ教育ス。教官茂手木隆次君、仲々面白イ事ヲスルナ。其の夜
 十時頃迄、クライント会話シタ。指環ヲ作ルニヤ、語が不明の
 為困マツタ。十二時ヨリ巡察に行、丁度秋季演習時分の様期デ
 アツタ。腕ガウズカユイ様、実に氣候ノ変リ方が甚ダシイ。二
 時中隊ヘ帰ル。異状無し。

七月廿七日 晴天 日曜日

第一内衛兵上番。渋井上等兵来ル。俘虜一名逃亡シタノガ帰ル
 ト聞ク。相変らずクライントの会話ス。戦争の話ヤラ故郷の話
 し。

七月廿八日 月

彈藥検査

備付彈藥 第六室

実砲 8 60 8・7・2・7

手榴彈 8

七月卅一日

第一内衛兵下番。夕方より盆おどり初めた。相変らず、直井軍
 曹主任となり、其の夜、僕も樽タ、キヤツテ、其の後ハガバヤ

シ等やり寝る。仮装行列、増渕軍曹カザリモノ、大根田伍長角力、大類志一隊歌、石川中尉生村笠おどり、仲々上手なものも居る。

八月一日 晴天

船着場衛兵

八月二日 晴天

今日は第二衛兵上番。昨夜巡察の時頭痛がしたが、今日ハ我まんして服務の爲、衛兵所へ行つたが、直井軍曹殿の御注意ニ依リ露久保上等兵と交代し、高田君と病院に行診断を受く。三十九度二分にて入院(ホスピタル)と決し、其の夜、信チャンの手厚い看護ニ依り、次日ハ快方に向ふ。而し平常の労ニ依り良く寝る。其の夜、無知にて寝夕。

八月三日 晴天

愈々、明日は交代等と言ふ様に伝へらる。扨紀念として指環を買に来る者、実に面白い様である。今日ハ油の汁に米粉に牛乳の煮たもの。今日ハ普食(普通食)を食ふ事出来ず、床(上)の中。夕方指環屋へ行。二度内々にて出たら俘虜看護卒が大さわざ。

〔欄外〕

文・時さんにゆびわの土産は一寸とて定めし喜ぶ事あらん。

八月四日 晴天

愈々帰る様になつたら、先発も来ないので、また少しをくれる様である。文さん、時さんにやる指わが出来た。散歩許可される。普食を食ふ。ホンガリヤ式料理パン食とわ言へ、福食物(マツタケ)が仲々日本よりかゝる。

八月五日 晴天

快方に向ふ。相変らず朝はカフェーにパン。昼は円豆(マメ)に肉のあけもの、丸いの実に美味であつた。

夜、酒保に於てカフェー及エチゴ(イチゴ)の甘づけ五留(フルール)、仲々美味であつた。

〔欄外〕

食事の時、レール打音や金の音一寸と思はる哈府にて

〔欄外〕

松本点呼の一件。

六日の夜に一同揃ふた。

八月六日 晴天

先発隊もヤレチカへ着シ、昨日より申送り初めた。愈々明日、
哈府へ行事になつた。勤務も二時に申送終り、我も中食後退院
す。其の夜は今迄習つた盆をどりを行ひ、盛大なりき。出来も
しない英語にて説明した。其の夜、クライン君が名残にて十一
時迄酒保等二行、遊だ。君は二度会ぬと言つて、実になげゐた。
其の夜、酒保二行、リトルブレツジにて大もてなりき。銀貨交
換等にて、各中隊迄乗込んで、仲々盛大なりき。

八月七日 晴天

今日ハスンガリーニて全部帰る。

八月八日 晴天

軍旗祭にて祝盃をあげ、軍歌を歌□、夜はぼんをどり、小林曹
長殿より一円寄贈され、故郷の事共思浮ひて、金一円にて黄瓜
買ひ一同に分配して、非常の盛会なりき。

〔欄外〕

シベリヤにて野球出来るとは思わなかつた。

〔欄外〕

中隊長より装甲車乗組員に訓辞、あいさつありき。

八月十日

今日ハ第三中隊の中隊長の発起にて野球を行ふ。メンバーを作
り、一同大いに振ふ。

石川中尉以下十二名、装甲車乗組む。

〔欄外〕

装甲者員^(重)一日雨だ□□言ふ

八月十二日 火 晴天

午後より日直なり。大出入院。

八月十三日 水 晴天

今日の朝、突然、第十中隊に於て偽似コレラ^(疑)発生して、第十中
隊は隔離して、我中隊にて食事運搬してやる。又中隊長殿御訓
辞等あり。中隊大消毒を行ふ。

八月十六日 晴天

金拾円を以て姉よりの時計を外塚仲立にて売る。其の金にて有益な本でも読むよにします。外塚に壹円与ふ。

八月十七日 上番 降

今日は大類軍曹殿とて衛兵、一夜中降雨にて困難した。

〔欄外〕

十七日 大□□□手紙發送

八月十八日 晴天

本日過番。石岡真一郎君より送りし絵葉書にて、信チヤンと歌ふ幼年時代の遊事等対談す。十一時半雨、帰る。

八月廿三日

今日ハ、夜敵襲か在于つて、夜非常にさわいだ。十時、其れは露の歩哨ノ所へ六名の露人が来て、其に射撃したそうだ。すると第二步哨にて又射撃して、旗手が第五中隊前通行の折、其に向つて又射撃した。同日日直にて、今野大尉殿より注意ありたり。

〔欄外〕

廿三日夜、稲葉君に世間話を打開た。

八月廿四日 日直 晴天(雲)

今朝外出の件に付て、中隊長殿より御注意。第一根生なし、全然ませす、何とも申理が無い。一増奮発せん。廿三日夜、野球が終り、裏にて(原)様な歌を行□□ひたすら郷里を思ふ念にたへず。昨夜も銃声五六発す。

〔欄外〕

一日隔のパン食、やうく、食良くなつた。

八月卅一日 曇・降雨

哈府停車場へ□□村□の為行、帰り「日本ストリート」を通り帰宮。

九月一日 降雨

コレヲ予防接種ス。二時の交代、衛兵上番。

九月二日 曇・降雨

本日過番ス

九月四日 晴・雨

本日は甲衛兵初めての上番である。余司令、聯隊長殿の御訓辞下腹へ力を入れるにわ一日の話専らなり。夜十一時五分、日本旅団司令部歩哨が、露国兵卒一名銃殺シタ。無事、六時過番ス。

九月六日

第二回予防接種行フ

九月九日 曇

哈府東方に於テ、応用射撃を行ふ。余、命中弾一発。

〔欄外〕

閑の時は尺八の練習呑気なもんだね!!!

九月十日 降雨 木

上番第二回甲内衛兵。

本夜、桃中軒桃太郎の浪花節あり。

九月十一日 晴 金

過番衛兵、夜酒保於て桃中軒桃太郎の浪花節を聞く。本日、今迄種々考込んだ。露国立身問題、断念して除隊の事。今迄わ身も終る程考たが、本日、断然反□スル。

九月十四日 土 晴天、降雨

本日上番。甲内衛兵。加給品^{ツマ}及購買酒にて酔フ事一方ならず。衛兵に服務ス。

九月十五日 雨天

本日過番。夜大風雨あり。

〔欄外〕

大島君と内□□□□毎夜く酒呑みん。

九月十六日 細雨から曇天

本日午後二時半、中隊長室に分隊長集合ノ命令アリ、今回我聯隊はゼーヤ河方向に向つて出発との事、一報伝令し、各々準備に取らる。

九月十七日 晴天 道悪し

突然の命令にて、被服の返納あり。仲々急がわし。正午、増渕軍曹殿と衛兵交代、服務ス。舎報アリ。我聯隊は第十三師団と交代して、来る十九日(時間不明)、汽車を持つて、アレキセイフに行、其れより汽船にてゼーヤ方向へ行由。其の行程約二百八十里、約七八日の予定行軍。故に我等心配スル者も在つた。但し第一大隊八・九・十二中隊残留の事。郷里へ手紙出す。ゼヤ地方は非常に危険なるとの事。又金の産地だと聞く。各人毛布二枚宛出す。

九月十八日 曇天

聯隊本部には、被服の筵包やら仲々急がわし。

石塚中尉殿が来ると聞く。昨日わ中隊長殿が師団副官に御昇進なられ、後任者不明なり。出発の時、装甲車、其の他、師団衛兵等帰る。昨夜、酒渡り、仲々盛会なりき。

九月十九日 晴天

愈々出発。四時起床。筵包を外へ出すやら仲々急がわしい。五時頃、全部終了して七時整列、本部前集合して軍旗を拝す。出発中隊第十・十一中隊及機関銃隊と、十時四十分列車にて、哈

府を出発す。中隊長見送りに停車場迄来る。一同乗組み出発す。先ず約七分二十秒はかりにて黒龍江鉄橋通過して、仲々地図には書□□莫大なる鉄橋で在つた。間も無く四囲を紅葉にて、言ふも言われず仲々の眺であつた。午後七時頃、ピラ駅二着ス。此の地にて飯盒すいさん終り一泊す。次日、四時半点呼、六時出発ナリ。途中の橋梁は過激派に焼捨られて居。四方の紅葉は又格別なり、何とも言われず。

〔欄外〕

汽車中四囲の紅色起筆□□

九月廿日 晴天

五時から出発ナリ。途中相変らず、其の夜日直にて七時頃アルハラ駅二着す。丁度日直にて合停車場に行、山田君との間に良からず。二年兵一同酒呑む。終りて寝ル。三時半の点呼終ル。

九月廿一日 晴天

四時発車す。車中相変らず四囲の影色良好也。橋梁の破損非常に多し。フスゴの迄、五十四ヶ所有ると言ふ。二年兵一同の団結も出来た事、出来た時は何時なり共、多いにやるべしだ。ポ

チカレオニ泊し、飯は兵□□より夕食・朝食はすいさんす。六
六聯隊にて六名殺されたと聞て、仲々ぶつさうなり。而し或者
の話には哈府より良いとの事也。明日は六時出発、九時着の予
定故、其迄下車の準備為すべし。終り。

〔欄外〕

ポチカレオニ於テ初霜を見る。

九月二十二日

本夜宿宮。明日乗船。

携行糧秣ニ依ル□場所□□患者の件、直チニ大本部前一時ヨ
リ六時引率外許可ス。六時の点呼は向フの台迄、物品購買服装
□□□□注意、勝手昇降禁ズ。

第一小隊、分隊長全部集められて特務曹長殿より御注意ある。
一日の気合。アレキセイフ着、午前十一時半。二時より六時迄、
市内見物ナリ。日本婦人の発展ニ於ては実に驚く。汽車中へ一
泊す。

〔欄外〕

三十銭ニテ

初めて西瓜を食ふ。

九月二十三日 晴天

起床。通常の通り。所が飯は次日の朝共四食分持参との事にて、
炊さんの準備急がわし。皆にぎりめしにして、余荷物鑑視^鑑の為
先行す。荷物積込の為、四時頃迄時間を要す。六十五分出帆、
ゼヤニ向ふ。途中、敵襲等の御注意あり。浪清謐にして暈の上
を行くが如し。

九月廿四日 晴天

船中にて、船中は汽車等よりはるかに良し。四方わ紅葉にして
実に美観と言ふべし。

九月廿五・廿六日 相変らず汽船中の四囲の美風をながめつゝ。

九月廿七日 午後五時ゼヤ着。其間に各港にて見物する者あり。
ゼヤ着オフシヤンカへ七時五分、三小隊着。昨夜信チヤンの言
葉。

九月卅日 中子頃終り。金鉾ヲ初めて見る。対岸衛兵為ス。

十月一日 本日、永沼少尉殿の命令ニ依り、向ふ河岸へ行く、水持来る途中、往復共露のまね歌を歌□□にて路を越す。帰途、コスボフシーニナに出会ふ。

十月二日 随分、暑も昨今厳しく成つた。地形偵察に十二時半より二時迄、其れから入番乙衛兵服ムス。七時半頃より露助の将校の喧嘩アリ、一同赴く、終り。

十月三日

今朝、突然の命令ニ依り、オフシヤンカに連絡ニ行。拾壹時頃着ス。当市ゼヤヨリ比スルニ実ニ淋しい町である。二時より、ザレーチナヤ村に向ツテ出発。イワノフ將軍の出生地の村を見て行。ウルカン河を渡りて、其の渡の流水を利用して、実に良く出来て居た。ザレーチナヤ村偵察シテ、日正ニ没してより、六時半中隊ニ帰ル。実に淋しい。夜わ信チヤンと共ニ寝ル。過軍襲来ノ報アリ。

十月四日 オフシヤンカニ宿ル。

十月五日 便船に依り、第三小隊の残部七名と、連絡兵小橋以

下十八名引率シテ帰ル。

十月七日 命令にて第六六聯隊、討伐中過軍と対し敵千五百名、内損害三百名。我軍六六第三以下一ヶ大隊のみ。損害、歩十八名・騎兵九名・馬三十二頭。原大尉・鈴木大尉戦死ス。馬三十二頭、約三時間の戦斗ナリト。夜わ巡察ニ行く。

〔欄外〕

□□□□為し物

十月八日 晴天

別に無し。8 W N j y に遊に行。月同、身体検査アリ。

十月九日 晴天

八時の整列。執銃帶劍。近防外出^{マヤ}に行。

十月十日

栃本軍曹殿、初年教育の為内地へ帰ル。中隊より荷物護送として、特務曹長以下二十名、アレキセーフ市に向ふ。

十月十二日 晴天

鈴木・福田の件ニ付、二三年兵一同談ズ。次日寛大に至る、示談事済となる。

十月十三日 晴天

初雪が降る。遠山雪にて白し。日直、本日上番衛兵、別状無し。

十月十六日 雪降り

朝より雪降ル。一昨日ゼヤ川の汽船は全部引払となり。河中淋し。市民の好意にわ聊カ感して居る。

十月十九日 晴天

対岸巡察に行。夜間の河を渡る。実に涼になつて居る。対岸の角の内にてパン、モロコ（脱カ）の地走（馳）。リーザーの娘非常に可愛らし。帰りて市内巡察ス。別状無し。

〔欄外〕

廿日の夜より初めて毛布を用ふ。

十月二十一日 晴天

本部内衛兵。十九日にオフシヤンカにて、曹長殿及青木上等兵等が過派と会ひ、約百六十発射撃して一発も命中せず。会報に迄た。而し大分驚たろう。夜信チヤンより電話。吉チヤンヨリ電話あり。次日早速、ハモニカ及野球界を送り来ル、実に新知なり。

十月二十二日 晴天

夜も大分寒く成つて来た。夜更けての寒である。本夜より、胴寸袴除くの外を防寒用具を用ひて良き命令あり。測図班の連中来る時牛島支隊の人□ありと。夜九時頃、大塚鶴松君が戦死すとの命令あり、特務曹長殿が苦戦奮闘したとの報あり。実に氣ノ毒な事、大塚君戦死すとは。装甲車の少尉殿とあり。要するに、特に成つて居らんと。寒気も随分増して来た。河は半分程凍つてしまつた。小供等が氷沁りして居る。昨夜より凍つた氷がとけて河を流て居る。危険の為対岸巡察は取止となる。軍医殿より過日花柳病予防の講話あり。一心不乱露語勉強せり。午後四時半より、ゼーヤ市民の好意ニ依り、活動無料見物をす。弁士等無く、六時閉会す。洋装つた婦人が出て、当地の婦人に比し、外地に於テ外人ノ写真見るは好□し考となる。

十月二十五日 曇天

廿五日の夜ハ雪が降ル。昨夜の巡察報告に行、最早櫓ヲ引テ歩クモノアリ。廿五日上番本部内衛兵。熊倉より師団司令部に於ケル金櫃の扱、及金^(塊)の故内地より持参した事等、沢山□在つた。戦時の衛兵勤務ハ内地に非シテ緊張した点も在るが、又于なる点も少なく無い。仲々珍談も沢山在る。夜にゲオルキン様の宅に遊びに行、佐藤軍曹殿より注意及御目玉頂戴す

十月二十六日 曇天 月曜日

異状ナシ

十月廿七日 晴天

本日は正午より日直申受ル、夜に至る。別ニ異状ナカリキ、其の夜六時半、突然の命令ニ依リ、左に記ス事項ノ命令ヲ受ケ、日直ヲ大類軍曹殿ニ送り、内田は炊事へ、糧秣及金銭受領に行ツタ。

一、服装ハ防寒ニシテ背囊□□□とす

二、糧食六日分、一泊料金十銭及茶代金五銭

三、三十台ノ馬車ヲテクダ迄護送スルコト

四、行程予定、廿八日ゼーヤ発、ザレチナヤ一泊、廿九日ザレ

(二一四)

チナヤ出発、ツユクダ着、三十日ツユクダ発、ザレチナヤ一泊、三十一日サ村発、ゼーヤ帰着。

五、燐寸・ローソク携行

六、テクダ着ノ上ハ、セヤ本部打電スルコト

七、長以下十名トス。其の人名、

長山秋次郎・軽部春吉・鈴木信次・青柳竹次郎・福田菊一・

川俣留吉、仙波文次郎・中田糸八・馬場岸太郎ノ九名ナリキ。

其の夜ハ請取にて途中。「□」の話にて、余も一方ナラヌ心配シタ。第十二中隊二行、途中の状況ヲ聞二行

〔欄外〕

日本軍ノ馬車(我々の)ハ二頭立一台三十名、露助ハ三頭立ナリ。

露助ノ郵便屋も同行セリ。

十月二十八日 曇天

六時半迄ニハ全部支度も終リ、自分ハ経理室に行ハ〇〇留頂キ、昨夜の命令ニ依リ、ザ村ニテ馬車仕度の予定ナリ。其の内に郵便局ニ至リ、敵襲ニ齎^(應)シタル場合等聞、写真ヲ写シ、七時半出發ス。約一里半ばかり行ト、山ニ差カ、リ、手足等凍テ物言事

出来ず。九時半マリケヤニテ約二十分休息シ、十一時半オフシヤンカ着。一同様ニモ御心配ニ成リ用便ヲ済マシ、一時オフシヤンカ出発ス。三時半ザレチナヤ村ニ着シ、其の夜一泊ス。此村ニ八十中隊の石塚軍曹殿以下十二名居るとの事。

〔欄外〕

我々が出発シタ朝、神山ガ射撃ニテ、露助一名殺シタト聞タ。其れも歩哨に立ツテ居テ行ツタソウダ

十月二十九日 晴天後曇天、夕方降雪

三時半起床シテ支度整へ、四時半出発ス。相変ラス四台ノ馬車ハ勢良くテクダニ向ツタ。約千米ばかり行ト最早山中ばかり、右見テモ左見テモ非常ニ心細い。良く左右ヲ見レハ、実に令ヒ十名ナリトモ長トナリテ行のに其ノ者ノ生命ハ我手中に在ル。若し途中にて敵襲ニ齎シテハ、如何セン彼等ハ実に呑気なものである。途中にて食事とれず我先ニト飛込ミ行知ラス、馬車ノ地上ニテハ居寝リスル。御話に成ラズ。一心不乱に□せず走ツテ行。我其の心程、あゝ国の父母ハ此の様だと迄思て居ないだらう。姉わ何シテ居ルダロウ、勝順文時様□の事が目の前ニ浮沈シテ居ル。何迄行ツテモ山又山、一露里毎の杭が渦巻ニ

成テ立ツテ居ル。雪あわく道路上ニ敷かれシカの足蹟在る、只途中ハ車音ゴート山ニ響キ渡リ、馬ハ腹部にあめの棒が下リ馬車引の髪ハ氷リが約一寸位から七八分位のが下ツテ居て、それは本当ニ馬車の上にテハ手足ハ寒くてシビレ、実に物も言へず。九時半コストロマ着。中食ス。直出発ス。約一時間位にて鹿に出合ツタ。山中ヲ飛行シカ三匹、其の先にて二匹。発砲セヨト思ツタガ、手足凍ツテ居ル為能ハズ。ホクロフカヨリハ雪さい交リ吹降ニテ、話すら歌するに言ふ者無く、四時無事テグダニ着タ。其の夜、守備隊の若月中尉殿に御地増ニ成リ、次日ハ滞在ニ決定ス。

〔欄外〕

兎角、第一回の陸地郵便護送だから仲骨モ折レタガ、又名誉ナリキ。

十月三十日 曇天、風
テクダニハ麦酒会社がある。キタイスキーの家にテ麦酒呑ダリ。麵麴等食ツテ入浴シ、其の夜ハ宿ス。

十月三十一日 晴天 天長節

本日ハ天長節ナリ。起床四時。五時半の出発ニテ、途中何の変り無く、相変ラズ寒い。鹿三匹出テ発砲シタガ駄目。九時半コトコロニ着シ、中食一時間寒いくの相変らず途中無事。三時ザレチナヤ着ス。其の夜ハ東八喧、或ハトランプニテ非常に愉快ナリキ。

十一月一日 曇天、風シカシ

六時出発。昨夜通れざりきウルカン河も馬車人ヲ容易に通ず。実に一夜の寒もあらず□ぬ。昨日、露助とて跳発して悪カッタ。七時半オフシヤンカ着。高田君ニ会青木ノセツチヤン等の御世話に成り、途中シヤンニテ中食シ、出ヲ生と非常に寒く成り風力く横顔吹切る様な寒さ、二時半無事ゼーヤに着ス。途中は歌、対岸の風寒し。聞所ニ依ルト、非常に皆様は御心配に成ツタとの事でアツタ。夜ハ下給品及生□ニテ成タトモ一同の請取にナリ、夜ハトランプヲヤル。床ニ就ハ十時半ナリキ。

十一月三日 晴天 (ニホーチ) デーテ

午後八日直。○時三十分より石川中尉殿ノ神山ニ対スル説問アリ。一同注目シテ聞テ居た。実に彼神山に取ツテハこの事、取替しの附かぬ氣ノ毒デアル。我らも一増務上ねばならぬ。一週

連続が交代となる。

十一月三日

シベリヤノ雪ハ積ツタラ溶ケヌ。櫓ハドシ／＼通ツテ行。何しろ初めてソリヲ見タノデアル。仲々急かワシク取ツテ居ル。其の通ツタ後ハ、二ノ字、否二の線が通つて居る。櫓の通行ハ暮ニ成つてから。衛兵に間食が渡ルトノ事デアル。温飩一ヶ半位ト聞ク。

〔欄外〕

時計番号(参考) 壺○参参八七号

十一月四日 曇天、午後降雪

昨夜の命令ニテハ、本日午前九時の交代の行ツタ所、副官ヨリ□ニしかられて帰ツテ来タ。十一時時分より雪が降り出シタ。夜ハ飯が来ルの来ナイノデ夜食ヲ二度も食ツタ。異状無シ。

(十二) (五カ)
十月四日 晴天

此頃の夜の寒わ又格別である。第十二中隊にては演習二行ツテ居る由デアル。

〔十〕
十月五日

此ノ頃ハ毎日雪降りテアル。而シ大いに降る理でない。風の間にく吹かれて、丁度霰の様に降つて来ル。パラく^{（天カ）}と之テ毎日中降つて居るのだらう。本当の雪と言ふ名だけに降ツテ居るのでアル。オフシヤンカヨリ連絡ニ来ル。新開上等兵以下三名。

〔欄外〕

神山の事件ニ附、埋葬金トシテ金五千留ヲ渡シタトノ事ナリ

十一月七日 雪、時々、曇り

オフシヤンカへ機関銃護送の爲、山田上等兵以下五名出発の由。□中止トナル。八時の整列ニテ大類軍曹殿引率ニテゼーヤ河に於テ氷上の第一回の演習ヲ行フ。其の内に休憩シテ氷上リヲ初めた。何しろ第一回生レテ初メテノ氷上リダ。守備ハ仲々上手なもの。約十五六米位の地点わ自由に上ツテ行。仲々面白く成つた。調子込でやつた所、其の夜も、がいたくて実に一寸困つた。将校室迄申送りニ行つた。実に泣様デアツタ。夜わ雪が積ツテアル所へ月夜であるから丁度昼間の様だ。実に明るい。之だけわシベリヤの独特の物であらう。三百米わ目中でアル。爾今、日曜日ハ外出ヲ許可サル、事ニ成ツタ。一同は仲々満足シ

テ居る。衛兵の間食ハ中隊ヨリ或ハ炊事ヨリ肉味噌等渡り一同の樂シみ。先す十時頃より初めて仲面白い。

〔欄外〕

氷上り第一回だが、仲々上出来なり

十一月八日 土曜日

本部内衛兵過番

十一月九日 日曜日

本日は午前中ハ日直ニテ、午後は戸叶上等兵殿と交代して外出する志た。直チニC君の家に行つた。愈々本談にうつつた。非常に喜で居た。此の間、テグタへ僕が行ツタ言ふノデ、ソレを見たいと言ふて居る。其れから此の間、僕が彼の家に居た時ドラカーと言つたので、非常に恐ツタが、堪忍シテ居タので返ツテ其ノ者が好意ニテ今度ハ是非交際したい(娘と)と言つて来た。実に出征中ノ一美談。テグタ行の朝、彼を見送つてくれた。学校内ニテ、リーザーの妹と共に。

〔欄外〕

ゼーヤ守備中に於テ、S君と其の他実に良い家であつた。
彼が夢見るトハ実に面白い。

十一月十日 晴天

本日は夜間巡察□が非常に寒し。八時にて○^(寒)下三十二度であつたと。別状無し。我ゼーヤ守備隊より二ヶ小隊行との事である。非常に困ツテ居た。我中隊すぐ行かぬ様に。

十一月十一日 晴天

本日八午前十時に衛兵交代す。其の内に命令が我中隊か十中隊かに下ると言ふので、衛兵所にて、一同非常に氣をもんで居る所が、石川中尉殿の御尽力を請たが終に終り我中隊より行事に成つた。夜九時の交代す。中隊へ帰り、其の夜に九一、八二丁に一ツモ寝ネズ終ニ夜明シテシマツタ。先ズ内田が□□□に迄行ツタガ決極シ字ニテ引分となる。朝迄一眼^(眼)もせず、陣中の美談たり哉否哉。

十一月十二日 晴天

昨夜ヨリ寝ネズ、非常に困難シタ。私物品或ハ其の他混包^(桶)ニ多

(一一八)

忙ナリキ。十時ヨリ大隊本部へ行答デアツタガ、マローシヤドームにて遊ぶ。彼の服装、口ノ囲ノチカの顔の下ヲ上に等実に良シ。正午帰ル。午後ハ入浴へ行。三時ヨリ公用証ニテCOW□宅に至り、内田ヨリ別れをして来た。其の良し情実に筆や言葉に儘シ難シ。キツス五回ス。其ノ後マローシヤ宅に至り、二名マローシヤニテ、非常にもてた。中隊に帰ル。兎角セガリキン宅にも至り別れをした。其ヨリ中隊に帰ル。ア、住ナレシゼーヤヲ去るわ、氣持良く無い。あゝ何たる男がゆく。彼等は毛と^(毛)うと言へ、実に其の親状は変り無い。

〔欄外〕

昨夜石川中尉殿に気合かかる。

〔欄外〕

別れの日、彼の親状^(心)、実ニ氣ノ害^(害)か、毛とうと言へ感心ナリ。

十一月十三日 晴天

ゼーヤ出発の日、郵便局ニ至り郵便ヲ受領シテ帰り、何としてモゼーヤを去るに良い氣持は無い。馬車か整わ無いので十時頃出発した。途中は寒中行軍の事として非常に寒く、夜八時半無事

オフシヤンカニ着ス。途中は彼の事思出されて、何とも飲食もいやに成る。心からである。其の夜、高田君・青木君等に話して、次日出発七時半。信チヤンハ心切だ、包帯に消毒ガーゼを下すつた。泣の内に別れて来た。ゼーヤノ週チヤンヨリ、バラの花の一件に就テ電話アリ。其の夜、准尉殿の室ニテ酒飲み、大根田伍長殿・増渕軍曹殿と口論ス。

〔欄外〕

バラの花が如各かとわ、余も今迄感ジナカッタ。

十一月十三日 晴天

相変らず行軍、先兵をなし、ザレチナヤ迄番兵にて来ル。其れより乗続ケ、コストロマにテ一泊ス。内田の酒にわ美味デアツタ。

十一月十四日 晴天、稍雪降る

六時半出発、テグダに向フ。途中何としても彼の事を思出されし成らんよ。六時、無事テグダニ着ス。其の夜一泊の予定デアツタガ、着直チニ荷物ヲ汽車ヘ積込ミ、其の内、高堀上等兵の斥候が出る。過派の女の間諜ヲ取ラエタ状報ガアリ、警戒シツ、

寝タ。次日六時半発、七時半無事ウシムンニ着ス。其の夜、未タ命令ガ何タリヤ理らん。只余わまず良さそうだ。二時半頃、装甲車が火災ニテ、余以下二十九名出テ応援ス。赤沢中尉殿ヨリ賞さん^(賞)されり。報告(人員) 出ス。

〔欄外〕

ウシムン六中隊に世話に成て居る間わ、しやくでくフルマンチエードーマの兵隊、「□」かとばかりに気合掛けテ居タ。

〔欄外〕

現今の寒では空さ一つの曇り無きも、星わ明に見えない。

十一月十八日 上番乙内衛兵。

別状無し。夜食ハ饅頭六ケ。

十一月二十日 晴天

命令アリテ、朝、小橋以下十二名討伐中第五中隊守留として、朝、装甲車にて、七時半、無事着ス。隊長殿に話て宿ス。討伐は一切密にして語る可らずとの命令アリ。

十一月二十二日 晴天

朝七時交代にてツイクダ。衛兵服務ス。第五中隊若月部隊、六時屯営出發ス。今ダ鉄道ハ不通なり。ツイクダ・ガンダツチ間三十六ヶ所、鉄道焼失シテ為に不通。今月全部要する為也と。実に馬鹿な事ヲするものだ。一昨夜金丁にて僕の勝利にて苦状も出た。取止トナル(□字)

〔欄外〕

敵よりも直恐ろしきシベリヤの寒さも国の為と思へば歌の通り哉。今日日没ハ三時、夕食も三時だ。

十一月廿三日 晴天、稍風

突然、石川中尉殿以下七名、ウシユムンヨリ来る。ゼーヤへ帰るとの事であつた。余も帰り度ハ山々で在つたが、非常に心配して居た所が、懐しきゼーヤに帰る事と成ツタ。喜し、何とも物の言フ様無イ。支度整い、私物品の件就テ、ウシユムンへ電話ヲ掛ケタ。早速、明日午前五時出發、ゼーヤへ帰る事に成つた。小橋以下四名。煙草無いと手困すル。

十一月二十四日 晴天

十二中隊^(機)持ツ理で在つたが、中尉殿の御意見ニ依り持たず出發ス。途中の寒さ又格別なり。何しろ中尉殿の麦酒の壘が外へ出して置タラ凍ツテ破レテシマツタ。其の中へ、又馬は表へつなきばなし驚たね。氷ヲ割ツテ、其の水ヲ馬に吞ませる。又、格別□□□。

十一月二十五日

午前五時卅分、コストロマ出發。二時半オフシヤンカ一泊ス。第十二中隊の大森君に出会。彼ハ初年兵教育の為に帰るのであつたが、命令の行違にて帰つて来られた。足部、冬傷^(凍)にかかつたとの事であつた。実に御苦労千万なりき。又、栃木町町会より慰問品金貳円頂いた。

十一月二十六日 晴 稍風あり

七時半オフシヤンカ出發。途中セーヤ川氷の山に取り丁度氷の上をそりにのり走る様實に南極でも行つた様であつた。正午^{十二}時無事ゼーヤ着ス。

〔欄外〕

廿六日氷の山を行様實にナンキヨクタンケンにでも行つた様

な有様であつた。風が吹くと身を切る様に寒く、陸のかわいた雪ヲ吹飛ばす。丁度風吹の様である寒□□行軍もきたの寒さに命がけだよ。

十一月二十七日 晴天

中隊衛兵服務ス

十一月廿九日 晴天

オフシヤンカヨリ青木君来る。其の夜御地増(圖主)の為に式円ばかり酒ヲ地走ス。飲過の為酔過テ財布を何れにか紛失シテ非常に後悔シタ。今後各の如き事為すべからずである、終り。

十二月七日 吹降り

今日非常に寒し。午後相変らず外出した。U君の家にて帰りをそいので、しかられた事。U宅より。

十二月十一日 中隊衛兵上番 晴天

第十二中隊にて渡辺大尉の指揮する一ヶ小隊ユワノフ・オフシヤンカ方向へ討伐に行。夜、岡上等兵連絡に来ル。

本夜、年賀状出すに附て非常に急がわしく□□した。

十二月十一日(二カ) 晴天

第十二中隊於テ、早朝出発スル。討伐は渡辺大尉の指揮スル二ヶ小隊、MG一銃。正午頃迄糧が整ざる為出発遅る。オフシヤンカ・ザレチナヤ・イワノフ方向へ、丁度、其の時、自分は衛兵にて夜斥候二回も出した。十三日、敵の過派約二百の敵と会ても戦斗せず敵わ退却ス。其の内、約十露里の地点ニ、シヤン方向にて五六十名の敵にて、突然射撃を受け。交戦約三十分間、我損害、冬傷患者約四十名(実わ廿六名)・戦死一名・負傷者ナシ。敵の捕品馬十六頭・捕虜四名・小銃一・彈薬若干、実に機関銃等わ凍つてしまつて射事出来なかつたとの事であつた。十六日帰ル。

〔欄外〕

戦死したら直ちに凍つてしまつたつて、驚の外無しだ。

田名網利三郎君 上等兵

〔欄外〕

M君の家にて十二の小野辺上等兵と会つた時わ又格別なりき

〔欄外〕

夜空を見ても寒の為に空が良く見えない。又、星がぼんやりして良く見えない。

十二月十六日 曇天

本日わ本部衛兵過番。オフシヤンカより連絡来る。

十二月二十二日 晴天

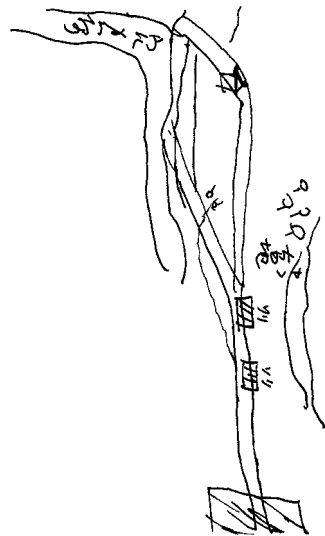
本日ハマレに見る好天気である。西部外衛兵服務。第十二中隊の兵来て、戦斗の有様聞テ実に驚かざるを得ない。戦死者田名網君ノ頭より血のあめんぼうが下つたという。

十二月廿一日

今野大尉ノ指揮する二ヶ小隊及MG一ヶ小隊はミア方向ニ向ツテ討伐に出た。約四百名の敵と会戦。約三時間、敵の死者三十名。我損害重傷二、戦死星野軍曹一名の外異状無し。実に今度の討伐ばかりは、敵も損害が多かつたとの事である（其の戦闘ハ）シアン方向と聞く。

十二月廿七日・廿八日 晴天

昨夜命令ニ依り、明日オフシヤンカ行事ニ決定す。実はオフシヤンカにて、新開上等兵以下三名戦死したのである。其の戦死は実に名誉な戦死である。



(1111)

廿七日、命令ニ依リザレチナヤ米山少隊連絡の為、新開上等兵以下五名（久我・斎藤・田島・手塚）、八時頃オフシヤンカ出発、ザレチナヤへ向ふ途中、任務ハ第十中隊の米山少尉殿が正月の下給品等持つて来テ、時間に成ルガ来ナイ為、オフシヤンカヨリ連絡ニ命ゼラレタノガ新開上等兵である。約四十分遅れてミリツイヤに行たそうである。約ザレチナヤ迄二里半、我等ハ五六回往復シタ事ガアル。約途中門の様なのが在る少し前迄行ツタ所が、自分も知つて居る。実に展望シ得ル所デアル。平地で、右の方は森林、左は遠ク（七〇〇米）ウルカン河が流て居ル。其の門ヲ出テ少シ行とカネテ敵ハ参謀がアツテ図に見ル通り四ケノ穴、胸位迄の深さが在ル。其の穴の中ニハ敵が数名居タ、

其ノ内ニ後方約二三百米の地迄ニ敵が表レタ。其方見ルヨリニ
 台の櫓^{（敵）}前後の距リ約五十米位アツタ。早クト前へ進シテ行
 ツタ。其ノ時前ニ混伏^{マツ}シテ居タ敵ト、約五十米ノ近クニテ突然
 射撃ヲ受タ。左わきと会戦シタ。其ノ内手塚ハ足部ヲヤラレテ、
 一同ハ防寒具ヲ脱シテ戦ヒ、其ノ内ニ防寒靴迄脱シテ戦ツタ。
 道路の左側ニテ道路ニ依托シテ、其ノ内ニ馬夫ハ二名一台ノ櫓
 ニ分乗シテ、ザレチナヤヘ行報告シタトノ事。其レカラ防寒靴
 ヲ脱シテ戦ヒ、実五十九聯隊初マツテノ苦戦ナリキト。サスガ
 ノ副官殿も言ワレルノサ、泪を落シタトサ。終ニ衆少敵セズ。
 新開上等兵は足部^{マツ}（一）、左目鼻側ト胸ニ、手塚ハ胸、胸部及頭
 部ニ命中、田島ハ顔面及額ヲ割ラレ横腹を射タレテ絶命、久我
 及斎藤義親の二名ハ無事ニテ、命令達スル為、ザレチナヤヘウ
 ルカン河ヲ通ツテ行ツタ。生残ツテ帰ツテ来タ。其の後ニテ全
 部被服ハ脱セラレテ各人襦袢一枚ニサレ、余^{マツ}ヘ手塚ハ目玉ヲイ
 グラレテ、田島ハ頭ヲ打切ラレテ、新開君ノミ其ノマ、ナリキ。
 其ノ報ヲ得ルヤ、増渕軍曹殿以下、直チニ後援シテ居タガ、既
 ニ敵ハ居ズ、死害ヲ引取りテ帰ル。実ニ其ノ苦戦ノ有様ハ言語
 道断ナリキ、余以下次ノ日オフシヤンカニ行、其レヲ見テ実ニ
 泪ヲ下サザルヲ得ナカツタ。残タル者ハ実に目さましい。又、
 手塚ハ戦死ノ時、殺シテ呉レ^{（苦）}と言ヒ、又撃^{（苦）}経^{（栗）}ヘサクジヨ^{（杖）}ー

ヲ折ツテ死シタトノコト、実ニ大和魂ハ是ニ於テ表レルノデア
 ル。勇カンナル哉諸君^{（敵）}わ在天ノ靈わ長く中隊^{（附字）}ニ止リ我等一同
 ヲ援護セラレンコトヲト。又中尉殿ノ弔辞ガ良ク出来テ居タ。
 明日、少尉殿ガ来ルトノ命アリ。

〔欄外〕

オフシヤンカノ村長サンダツテ字カーツモ出来ナイツテ驚イ
 タネ

〔欄外〕

十二月廿^{マツ}日 オフシヤンカニテ河（ゼーヤ河）ヲハツテ来
 タ敵ヲ射殺シタノハ実にイライナ^{（本）}

十二月廿九日・廿八日

中隊ヨリ十八名来ル。（又）廿八日、小橋以下十七名来タ。石川
 中尉殿と、二時敵ガ在ルトノ報ヲ得テ、一同武装シテ居タ。其
 ノ内ニ二長^{（本）}沼少尉殿以下十八名着シ、少尉殿以下十名櫓ニ分乗シ
 テ、少尉殿が長い刀ヲヌイテ行様良カツタ。実に良カツタ。互
 ニ其の前ニテ見テ居タ。

〔欄外〕

十二月廿八日ニ下土哨ニ出テ、其家ノバルーニナトノ話ニテ、
仲々何処へ行ツテモモテルなり

〔欄外〕

卅日ハ新開君以下ノ葬式デアツタ。

十二月^マ日

夜二時半命令アツテ、少尉殿ト対岸ノ中央道路ヨリ五露里ノ地点へ、夜斥候ヲ命ゼラレタ。小橋以下十名、經理室ニテ櫓が揃ハズ持ツテ居タ為、四時頃出発スルコトニ成リ、其の内出発□□。夜寒く着タガ別ニ状況ハ何ニモ無く、八時ニ帰ツテ来タ。

十二月卅日

今日ハ命令ニ依リ、正午頃小橋以下廿五名、永沼少尉殿ノ部隊ト分遣ニ別舎ニ成ル事ニ成ツタ。糧秣ヤラ其ノ他諸物品ノ受領ニ多忙ニテ、小池上等兵ガ兵舎掃除ニ来タ。其ノ内掃除モ終リ、引起シタ。其ノ夜、福田伍長殿ガ来タ。先ズ自分古参者ガ出来タ理ダ。何しろ卅一日ノ室越ダカラ御話ニ成ラナイ。其ノ夜殆ンド寝スニ、正月ノ御地増^{施志}作リニテ、第二号兵舎ニテハ、兎が餅搗ク様な白にて作り、各人一升宛正月ノ御地増ノ品ニハ、餅

(一二四)

各人七八切ヅ、ハ在ツタ。ツブシアン、林ゴ^(橋)四ケ、梨一ケ、松前イカ一枚、酒各人三合宛、自分ガ糧秣ガ、リダケニ、仲々骨折レタガ盛大ニ出来タ。

大正八年目出度し

〔欄外〕

在天ノ靈ヨ、永ク中隊ニ止マリ、生等一同ヲ擁護セラレンコトヲ。

大正九年度

一月一日

御地増ハ前記の通り、御地増モ食フ所デ無く、永沼少尉殿ト討論ヲ戦ハス

一月二日

小橋以下六名、オフシヤンカヨリゼーヤニ向ツテ連絡ノ為行ク。途中ノ休憩地ニ於テ、ゼーヤ着セリ。酒二升、大類軍曹殿トノ談判。四時半ノ件、ペルウイラーズ・ヤロススキー・ドーマス^{ピー}。

一月三日 晴天

八時半、中隊出発ス。途中、民刑^(審力)コルフチエンコニ会ヒ。オーツカもスイ、休憩地ニテ与フル。シベリヤノ男氣別ナリ、人氣別ナリ。男トシテ生レテ男ヲ知ツタ廿二才の春早く。

一月五日 晴天

新年^(宴)演会之前祝トシテ、永沼少尉殿ノ御地増アリ、余銃前哨。

一月六日 称々雪降ル

称々、本日ハロジエストウオの日である。各家毎ニ呑歩ク。夜(午後参時半)より、オフシヤンカ南方の(ターシヤドーム)ニ於テ、夜御地増ニ成リテ、仲々盛大なる下士哨デアツタ。

〔欄外〕

ナターシヤの御地増振リ

一月七日 晴

午後二時頃、内地より補充兵として来た連中が着タ。十二月六日ニ内地ヲ出発シタノ事デアツタ。高田様、鈴木君、光□さん、渡辺要八(十二中隊)、柿沼柿次等が来タ。定めし内地ノ珍談も

沢山在つたろう。次日ハゼーヤへ向ツテ出発シタ。又ウシユムンより我中隊の兵隊が護送シニ来た。

一月廿六日

昨今はオフシヤンカノ勤ム、愈々、規則ガ厳正ニ成ツタ。会報等の在るし、又廿四日ニハ中尉殿カ演習等行われた。廿五日夜、オフシヤンカ炊事場ニ於テ、高田兄に、余のシベリヤ残留を語ツタ。又昨夜(廿四)は、中隊に居て寝られず程考たのである。先達ては准尉殿に返答したので困ツタ。本日(廿六日降雪)南端病院ニ移転ス。其の準備にて多忙なり。守衛兵過番。

一月廿七日

本日衛兵過番。篠田軍曹殿より哈に於て好き所在の事を手紙にて承知した。又廿九日にわ高堀上等兵殿が来らるゝ事を知る。

一月廿九日

今朝は露国側糧秣運搬の為、約糧二百台運搬し護送して行た。第一期トナリキ、此の日出発に附て、ペレオチャ左藤軍曹殿より言われた。

一月卅日 コストロマ着。其の夜、永沼少尉殿宿舍ニ行、チャ
ンチロー二罐打ぬき、余は確かに二壘は呑んだ。十時に寝て五
時半ニ起きた時其の酔加減は同じであつた。

露国側の将校三名と永沼少尉殿火傷の爲少尉殿命令せられて共
に呑んだ民刑(警力)の野郎の氣つかまり具合は別で、平素より交
さい(器)の具合は別であつたからである

一月卅日

一日中飲も食ふ事出来ず、櫓の上にて寝て居た。三時半テグダ
着。停車場内にて宿す

一月卅一日

テグダ停車場に宿す、其の夜、ピワ(琵琶)及勝田新左衛門の浪花節に
て、又自家の方を思ふ。

二月一日 早朝テグダ出発す。何しろ三百台の櫓を引連れて米
山少隊マ十五名、テグダヨリ廿名、約八十名の兵にて護送、分隊
長は四十台の馬車監視、仲骨折れた、其の長形五露里の長さな
り、中には何台とも無く櫓が打つぶれて、其の夜コストロマに
着し、二日無事オフシヤンカに着す、○・六〇度ありき。

二月三日 六時半迄第壹号兵舎に集合して、ゼーヤへ行。酒二
升其の買方の困難及事ム室へ酒出した関係□渡とのんだ。特に
民警副長トロヒモフベケルマダム君の家にリーナさんと話手紙
手続の具合、御地増、ジエガルキン君の家に御地増、及次日、
赤垣源藏の二代目、高橋の英語、小橋の露語仲々討つた。リー
ヤの可愛らしき、まろーしやの腕の力は又格別なりき、一日帯
在して、五日「」また出て帰る。其の二三日寒し、日中四十
度や四十五度目新しからず。

二月六日

捧給頂く(種)(六円二〇)。残留の確悟(確)も確(確)まつた。明日より煙草
止めて、一増勉強せよ。

シヨケウナ、ペケル、入浴場の件。

二月十四日

昨今の風雲は実に、露亜の戦場具合、過派の具合、二月九日過
派ト日本軍の交渉が整ヒ平温(温)ニ成り、歩哨が「タレカ」との事
も言わぬ様な有様と成つた。十一日、となりの主人が来て、ナ
プンタ着以来何の話も無く、唯遊んデ歩く。交渉が在ツタ其の
夜、モイシエーフ君が帰り御地走、僕の短刀の携行、石川中尉

殿ノ遊ビニ来ル迄、余の取りシ動作、彼ニ煙草ヲ渡した事、日本軍隊に過派が在ると言われた事、僕の手腕。ゾーヤ・マローシヤの舞踊。兎二角、将校同伴にて遊ビニ行ツタのは、之が一番初めてだ。其の後、シヨケウナに遊ビニ行く事二回。小橋の露語も愈々表われて来た。リーナ・アニヤ・パナ・ミーチャの言、及リナ君の言語の表情、及其の具合等酒呑んで酔ツテ遊ビニ行ツタ。

二月十一日 紀元節の酒呑み、高田君等遊ビに來タ、呑んで、此の頃の有様ハ、実に御話にならない、過派が銃を持ち、胸には花を附けて、乗馬にて飛んで歩いて居る、実に世の変りも甚だしいものである。仲々過激が全盛デアル。オフシヤンカにても、ゼーヤにても一週間後にて八千の兵ヲ集中スル事が成との事で在る。本日辺り聞所に依ると、ゼーヤ・トロフイモフ(民警副官)ノ娘リーナ等独にせられたとの事で在る。又余は此の女も良く知つて居る。ザレチナヤの部下約八十名を率フル者、コーンレフ^マが馬鹿な男も在る為、三十五日間に於テ、ゼーヤ引上る予定も変じ、今兵卒に至る迄非常に心配して居るので在る。又露国側のゼーヤ辺の状態にて□□□□実に此の間三百台の馬車にて持つて來た荷物も全部倉庫にて封印セラレテ動かす

事出来ざる様な有様と成つたとの事で在る。又ゼーヤ辺では露国側と交渉の為、馬車を日本軍に貸す事禁ゼラレ、非常に困難シ糧秣或ハ被服等は全部焼去^燃して立去るかと言ふて居る。又ゼーヤにては、過派の電報にて市中仲の盛況で在タとの事、又女郎屋或は日本軍側の住民等も全部引上るとの事で在る。実に今の有様は言語に尽せぬ所が在る。是非一番^{安カ}全な所に引上げたものだ。余の露国残留の念□□□□心配セラル、様な有様である。紀元節ハ、ザレチナヤ、コーンレフの為ニ取止ミ。

〔欄外〕

(多忙中にて)

東方時論ヲ読ム

〔欄外〕

テグダ停車場にてコルサーコフ君及トロフイモフ君に会フ、

今方の別レ(二十一日の夜)

二月十六日 石山中尉^マ下二十名にてゼーヤ糧秣護送の援後の為コストロマに守備の目的ヲ以ツテ出発ス。此の地には五、六軒の部落にて、余ハ復往七回目此の地に守備。三日間に十八

日夜オフシヤンカヨリ我中隊全部引率、又女郎置家等引上げて来て、同宿であつた。守備中ハ通訳、又宿舍割、金銭払にて実に多忙であつた。

二月十九日 晴天

中隊一同と七時出発、四時頃テグダに宿ス。露人の宿舍にて、二十一日乗車の理でアツタガ、貨車ノ都合の爲、遅れて二十二日乗車の事に決定シタ。十九日の夜、ウシユムンに向ツタ□中、鉄道破壊シテ、憲兵及日本女郎二名が死ス。同宿スル日本軍人ハ死セザリシハ天命ノ致ス所ナリ。此の地ニ於テ、砂金壹匁五分、金五円にて買フ。内地の紀念トシテ求メタ。其の夜ハ此の分遣隊にて(テグダ)哨舎ヲ焼ク、貨物積込使役長トシテ行、^(車)氣車来ズ。

〔欄外〕

二月二十迄に全部ゼーヤ引上終ル

二月二十二日 早朝より起床シテ、貨物積込使役長トテシテ部下ヲ指揮シテ行。九時半頃終了シテ朝食ニ帰ル。十時貨車二乗込ミテ、午後七時二十分、テグダ出発ス。二十二日午後四時頃

ルフセウ駅ニ着ス。

其の駅にて聯隊本部の列車にて脱線シタ為、次日午前十時四十分迄、遅レテ出発ス。正午(二十四日)ヨリ衛兵上番司令。ルフロー駅及ウルシヤ駅ヲ通過シテ、ジロー駅ヨリ特ム曹長殿と^(機)汽関車に乗込み、実に夜ハ寒かつた。クウイーンガ駅ニ着テ、第五中隊と交代シタ。クイーンガヨリ北側の断崖ヲ見ツ、ハルボン駅ニ着ス。時ニ二十八日正後。南ニハシル河を眺メツ、仲々シベリヤ鉄道ノ金のかゝて居る所も在る。又ハルボンヨリ石炭ヲ産出スル。明朝ハカリムスカヤニ着スルトノコト。シルカ駅に石炭の産を見る。

二月二十九日 カリムスカヤ駅より命令ニ依り、約三十里、東清鉄道ニテ南へ行、アンドリアンフカ駅ニ着ス。当分此の部隊ハ此の地に駐屯する事に成り、貨車生活をす。三十日俸給を受領ス(六円二〇)

栃木県益子尋常高等小学校

高一 代々木ヨネ様

仁平マス様

満州特立守備隊熊岳城^(地)

Ⅲ 三中隊四班

石搗蔵金野□□□

神戸市

内外貿易株式会社

神戸市下山手通り 九丁目卅四

片山茂丸

吉川正一様方

小橋 貫一

沼尾 真弘

山城 強一

吉沢 清

鈴木 信

青柳 竹

高橋 武

和気 寛

篠原 弘吉

小西平□郎

一小隊ヨリ十名(拾本)

□時来書

栃木県足利郡北郷村大字大月

志部 実雄

志部 幸雄

栃木県芳賀郡益子町字下大内

大田 長蔵殿

益子町字塙 小出 ハツ子

仙台駅弁当受領数

本部 4 7

九中隊 4 一三四

十中隊 4 一三六

十一中隊 3 一三十一〇 (二先発)

十二中隊 2 一三四

計 十七名 五四三

総計 五百六十名

□□□□

仙台市弁当受領数

ス (PIPE)ーシキ	マッチ	ソーリ	食塩
ヤポンスキー	日本	ワレーニエ	ジャム
ニエート	No not ナイ	ポターヂ	与ヘル
ドーマー	父	スラーヅコ	甘マシ
ロスキー	ロシア	サーヅ	庭園
ポリシエーク	カゲキハ	フラーム	寺
ワイジェーチェ	御這りなさい	ピーウヲ	麦酒
ブラガダリ ユーワス	有難う	ウイノー	サケ
ダーイチェ ムネー ◎	私ニ何々下さい	スワーニーナ	豚肉
クフレーブ	パン	ケター	鮭
バジェーチェ セター	此方へ 御出ナサイ	ボターイ スコレエ	早く出セ
ラヅヅイハーヂ	休息スル	ジウコーラ エレメンタルーナヤ	学校 (□)
フホーヅ	入口	ヌージニク	WC
ウイホズ	出口	ムイロ	石鹼
ゾラストイ	御早よう	ゾーシノ	イキクルシ
モヨーポチテーニエ	今日ハ	コリヤーチナヤラダー	ゆ
スカレー	早ク	ウーリツア	町
ベルシャットケー	手拭ヒ	シローコ	広イ
サーハル	砂糖	テーヌノ	セマイ

(1110)

下士以下 壱百三十二名受く

将校 参名

総計 壱百参拾五名

四月十五日午前九時迄に、大隊副官の許に集合シテ打合ヲ為すべし。

自分等の給与は、第IIヨリ受く。

本部

将校十五名(准士官以上)

兵卒五百二十三名

九中隊	4	将校	下士卒
十中隊	4		一三五
十一中隊	3		百三十六
十二中隊	2		百三十二
本部	3		百三十一
計	一六		7
右取消ス			五三八

馬三

第二小隊人名表

																	特業		
																	先 ^{〔朱筆〕}		
																	先 ^{〔朱筆〕}		
																	官等		
一	一	一	一	二	二	一	一	一	一	上	伍上	上	上	上	伍上	伍	軍		
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番号
五味田堅一	入江金次	入江金次	大塚鶴松	熊倉清吉	福田金次郎	別井王	船田儀一郎	山田光司	清水俊雄	斎藤丑蔵	淡井鬼文司	古沢儀七	小池覚三郎	大関義蔵	福田末一	福田佐四郎	大類志一	直井勝四郎	氏名

通 喇 治^マ機

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
俣野文一	西尾大吉	斎藤勇	鈴木理一郎	手塚末吉	本島夢三	神山峰四郎	萩原広好	大照順海	尾崎山五郎	阿部梅吉	茂手木隆次	川崎源次郎	稲葉源太郎	横田長三	塩田彦一郎	茂木攀	小口峰	石塚岩蔵	大出年次

飼 看		酒		工作		特業		第三小隊人名表	総員四十六名								
一	上	上	上	上	伍上	伍	軍			二	二	二	二	二	二	二	二
8	7	6	5	4	3	2	1			47	46	45	44	43	42	41	40
檀山	高田信一郎	青木儀助	石川光司	岡秀雄	新開八百八	大根田俊	増渕常			仙波文次郎	渡辺藤次郎	馬場峰太郎	蜂須賀義治	高橋金蔵	北村政一	中田 衆八	佐藤 末吉

		銃工		喇		木工		防工		防工		工作		銃		縫		喇	
二	二	一	二	一	二			一	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
田島 光三	赤羽 末吉	大森 寿	橋本彦次郎	小松 兼吉	舟山 愛英	塩田彦十郎	赤間 吾市	坂 本 唯	芝塚 真次	長山喜代松	小林 源吉	高橋岩次郎	市田 孝之	柴野吉太郎	堀井 敏三	加藤 勝市	久我 慎作	鈴木 清	篠崎右三郎

第三小隊総計
四十六名(右□分隊長以下)

二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	
山本甚一郎	菊島武三郎	斎藤義規	山本文一	島田房吉	飯塚吾作	鈴木重隆	川住佐一郎	岡井真一郎	中村新三郎	須永種三郎	野村栄太郎	斎藤善平	松葉源太郎	田辺井武七	平塚善四郎	湯沢房次郎	斎藤竹吉	平要	

葉書表書左の通り

派遣軍第十四師団歩兵第五十九聯隊第十一中隊

何某殿

中隊人員各小隊(四月六日現)

小隊	將校	軍曹	伍長	伍上	上	二三	新	先発	計
1	1	1	ナシ	2	6 ^(看1)	18	20	2 ^(兵)	47
2	1	1	1	2	4 ^(看兵)	17	21	1	46
3	1	1	1	1	1 ^(加)	18	21	1	46
事ム室		曹1							2 ⁽

中隊長以下総計百四十五名

本日食需伝票面百三十七名

総計
四拾七名
(栃本軍曹以下)

新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二	新二
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	
篠崎 広吉	潮田 豊吉	相馬 良一	川又 留吉	田上 嘉重	高橋 忠次	福田 菊一	渡辺 秀吉	渡辺岩次郎	和氣 寛	篠崎長五郎	斎藤 輝次	高橋 武次	青柳竹次郎	阿久津金弥	稲見 末吉	石川 一郎	高橋 直太	小西平次郎	

中隊長及幹部

中隊長	第一小隊長	第二小隊長	第三小隊長	特務曹長	曹長	軍曹
大尉	中尉	少尉	准尉	曹長	曹長	佐藤勘兵衛
竹内 吉郎	石川 淳	永沼 猛	坪田 敬親	神山 庄造		

栃本町 泉町三丁目

同町本町

同町本町

栃本町青年団長

栃本町青年団旭町支部

下都賀郡長殿

下都賀郡□□村

栃本町□□町

栃本町河合町

栃本町嘉右衛門町

派遣第十四師団ボーロ派遣守備隊七中隊

福沢 末吉殿

加藤 春吉殿

小林亀太郎殿

和久井太平殿

加藤利一郎殿

唐木田要吉殿

加藤 □吉殿

和賀障次郎殿

小橋福太郎殿

佐山 弥吉君

第二師団経理部□□□□□□

栃木県塩谷郡矢板町

野沢副官 竹内 真郎

矢板町青年団

大坂府下南河内郡野田村字南野田

片山 茂丸様

矢板支部

東京府下西巢鴨町庚申塚六二六

鶴見 力造殿

愛国婦人会

東京府浅草区光月町一ノ一

小橋豊次郎殿

矢板支部

東京市浅草区千束町

増山 安正殿

東京市浅草区浅草町二番地

鈴木栄一郎様

東京市日本橋区浜町一ノ二 相賀武一様方

福沢 陸殿

寺井文吉

栃木町万町三丁目

旭町一丁目

木村福一郎

船越 竹吉殿

山中熊吉 山野井与市

同町 入舟町

大木清造

橋本信三郎 杉山海一

長尾庄次郎 峰岸嘉一郎

高橋豊次郎殿

佐山徳松

川田光五郎 梨本彦太郎

岡町相生町

塩浜辰之助殿

旭町二丁目

栃木町々長

榊 原 経氏

加藤利一郎 田中トメ

栃木町在郷軍人分会長

寺 内 顕殿

南雲秋四郎 梁島英寿

仙台中島町八〇番地

竹内 寿真殿

旭町三丁目

宇都宮市池上町

檜山 金三殿

黒□金□郎

大田千吉 小林松太郎

下都賀郡富山村

唐木田要吉殿

森田市造

木村文吾

下都賀郡栃木町石町 上原忠平方

加藤虎之助

五月十一日出動

甲内衛兵歩哨特別守側

一、軍旗歩哨特別守

軍旗及赤印アル箱ヲ守リ、聯隊副官、舎営日直將校及旗手
外手の触ル、ヲ許サズ、但シ大急ノ場合ハ此の限りニアラ

ズ

二、第一歩哨特別守側

(一) 入口ヲ出入スルモノヲ監視シ、猥リニ外人ヲ接近セシメ

ズ

(二) 夜間ハ本部建物東南側ヲ見廻リ、特ニ火氣ト盜難ニ注意
スベシ

三、第二歩哨特別守側

厩附近より本道ニ至る間を見廻リ、特ニ西方ニ対シ敬戒ス
ベシ

終り

宇都宮歩兵第五十九聯隊

第十一中隊第一小隊

小橋貫一

歩兵第五十九聯隊

第十一中隊第一小隊

ル―三九 小橋貫一